

東アジアの歴史と未来

佐々木恒平

目次

第I部 歴史論集

中国語について	1
中国の近代化	2
満洲事変の軍事思想	4
世界最終戦争	6
グアムと沖縄	7
中国を封じ込める	9
平和の利益	11
歴史とは何か	13
大東亜戦争の真意	15
アメリカの参戦	17
ナチスとヴェルサイユ	19
	25

明治憲法と日本の国体	27
法治主義	29
日本的近代	30
軍隊の強さ	31
第II部 科学・哲学論集	33
マルクスについて	34
捕鯨について	37
政治と学問	42
英語の特徴	44
言葉について	46
イエスと奇跡	47
第III部 中国論集	48
米中戦争	49
南京虐殺と便衣兵	52
『狂人日記』について	56

第I部

歷史論集

中国語について

1

旧約聖書に、バベルの塔という話がある。むかし人々は、天まで届く塔を作ろうとした。塔は途中まで出来上がったが、その不遜な行いが神の怒りに触れ、完成する前に壊されてしまった。さらに神は、二度と塔が作れないように、人々が使う言葉を乱した。互いに言葉が通じなくなった人々は、協力することができなくなり、塔を作れなくなってしまった。

さて、実は、世界にはこの問題を解決した民族がいる。解決法は簡単で、言葉が通じないならば、共通の文字を使えばいいのである。同一の文字が同一の意味を表現するようにすれば、言葉が通じなくても、文字を使って互いに意思を伝えることが可能になる。それが漢字である。

中国人はこのようにして、異なった言葉を話す人々の間で、意思を伝え合う方法を開発した。つまり彼らは、バベルの塔を作る方法を手に入れたのである。秦、漢、隋、唐などの大帝국은、みなバベルの塔である。漢字こそが中国文明の本質であり、それは人類の最も偉大な発明だと言えよう。

しかし、漢字には副作用もある。漢字は、それ自体が独自の論理を持った文字の体系であるため、対応する言語を持たない。つまり、中

国語は書き言葉としてのみ存在し、話し言葉としては存在しないのである。それゆえ中国人は、自分が普段話している言葉を表記する手段を持たない。これは、普遍言語としての漢字が持つ必然的な性格である。よって、ある意味で、すべての中国人は文盲である。漢字は、西洋的な意味における言語とは全く異なるものである。

人間の精神生活は、言葉を使用することで豊かになる。そして言葉とは、話し言葉と書き言葉が相互作用することによって発達してゆくものである。ゆえに、言葉と文字とが乖離した中国人の精神生活は、高度なものにはならないだろう。中国人の感情が未発達であるように見えるのは、これが原因ではないだろうか。彼らは、こまごまとした感情のはたらきを言葉によってとらえることができない。概念としての普遍性を持つ漢字は、個人の感情を表現することには向かないのではないか。

また、中国型の帝国の欠点として、非常に脆弱であるという点が挙げられる。中国の王朝は、ローマ帝国のように法律によって統治されているわけではなく、もっぱら為政者の徳によって維持されている。したがって、その徳が失われたと判断されたとき、王朝は維持できなくなる。たとえば国内で紛争が起きたときに、為政者の対応が適切でなかったならば、帝国は簡単に崩壊するだろう。中国製のバベルの塔は、ジェンガのようにもろい。そして一度崩壊すると、中国大陸のみならず、周辺地域にまで大きな影響を及ぼす。

いわゆる倭国の大乱は、漢帝国の崩壊によって引き起こされたものだし、白村江の敗戦は唐帝国の成立に付随するものである。日本の政治は昔から、中国の巨大な力に翻弄されてきた。それゆえ、中国の影響力を排除して、日本国内の秩序を維持するために、我々は古くから鎖国政策をとってきたのである。

日本の建国とは、中国からの独立であった。日本が建国してから明治維新まで、天皇と中国皇帝の間には、一度も正式な国交が結ばれていないのである。それは偶然ではありえず、中国との断交が日本の国是だったことを意味している。

しかし、この百五十年以来、日本と中国との結びつきはますます強まりつつある。我々はもはや鎖国を続けることはできず、中国との新しい関係を模索してゆかねばならない。

2

中国と対等に渡り合うためには、我々日本人も漢字を使いこなせるようになる必要がある。日本人は、漢字を表音文字として使っている。しかしそれは、漢字本来の表意文字としての使い方とは全く異なるものである。

私自身、漢文を読むときは、日本語を読むときは全く別の頭の使い方をしているという自覚がある。日本語の文章はまず音として認識されるが、漢文はそうではない。漢字を見ると、そのイメージが直接頭の中に広がるような感覚である。表意文字としての漢字を使いこなすためには、特別の訓練が必要である。日本でも、そのような教育を始めるべきではないだろうか。

今のままでは、日本は中国にコントロールされてしまうかもしれない。そうではなく、逆に日本が中国をコントロールするためには、漢字を使いこなせる優秀な人材を大量に確保する必要がある。漢字を使って自分の考えを自由に表現できるようになるということは、おそらく、数学者になるよりも難しいことである。

さらに欲を言えば、日本人が新しい中国語を作るべきである。現

在の中国語は、わりと最近になって作られたものである。簡単に言えば、マルクスや毛沢東の思想を表現するために作られた言葉であり、それらの思想を表現するのに最適になっている。このような言葉を使い続ける限り、中国人のものの考え方は変わらないだろう。つまり、彼らのものの考え方を変えるためには、彼らの使う言葉を変える必要がある。中国人の使う言葉を日本人がコントロールすること。それは、日本が中国を征服するということである。

中国の主権者は漢字であって、人間ではない。そのことをよく理解せねばならない。

中国の近代化

私は、近代化に必要な要素は二つあると思う。

一つ目は、国民意識である。我々は〇〇国民である、という意識を持った人々の集合が、近代国家である。そして建前上は、彼らが国家の主権者であることになっている。

二つ目は、都市文明化である。近代化とは、人口が都市に集中する過程である。都市が農村から人口を吸い上げ、彼らを賃労働者として工場で働かせる。それによって工業生産力が向上し、工業製品が街に溢れ、都市の生活が豊かになる。豊かな都市の生活にあこがれて、さらに農村から都市へと人が集まる。

この二つの要素によって、近代化は構成されている。

そして、近代化を始めるためには、国家の権力を、古い支配者から新しい支配者である国民へと譲り渡す過程が必要となる。フランスでは、革命によって王政が廃止され、ナポレオンが国民国家を完成させた。日本では、戊辰戦争によって旧支配者である徳川政権が排除され、明治政府が成立した。

それが暴力的なものであるかどうかは問わないが、旧支配者を排除する過程がなければ、近代化は始まりようがないのである。では、中国において、このような近代化の過程は存在したのだろうか。現代の中国はまさに近代国家であり、農村を置き去りにした都市文明であるよ

うに見える。中国の近代化は、どこから始まったのだろうか。

辛亥革命によって清朝は打倒され、中華民国が成立した。しかし、それは古い中国そのものであった。革命後も中国各地には軍閥が割拠し、それぞれの地域の政治と軍事を一手に握っていた。国民政府は、それら軍閥の元締めでしかなかった。革命の内実はこのようなものであり、このままでは中国の近代化は不可能であった。

中国大陆において本当の意味で近代化が始まるのは、満洲事変からである。日本軍は、当時満洲を支配していた張作霖・張学良らの軍閥を排除し、五族協和を理想とする満洲国を立ち上げた。このときに、近代化の第一歩が踏み出されたのである。

石原莞爾は、満洲国を共和制国家とするつもりであった。しかし、様々な事情によってそれは断念され、満洲皇帝をいただく君主国として建国されることになった。にもかかわらず、その理想は依然として五族協和であり、すべての民族が平等に国政に参加するべきだとされていた。満洲国は、近代的な国民国家として建設されたのである。

たしかに、現実の満洲国はその理想とはかけ離れたものであった。しかし、理想をそのまま実現している国家など、この世界のどこにも存在しない。むしろ、理想に向かって努力するところから、国の力は生まれてくるのではないだろうか。

いずれにしろ、近代的な理想を持った国家が中国大陆に建設されたということ自体が、非常に大きな意味を持っていたのである。この事件こそが、中国近現代史におけるターニング・ポイントであった。その後、日本の資本が導入されることによって、満洲は工業国家として発展することになる。

近代化が農村を廃れさせるものであるならば、満洲から始まった近代化の流れに対して、農村の利益を代表する政治家が現われたのは、

当然だったのかもしれない。

毛沢東主義は、マルクス主義とは根本的に異なるものである。毛沢東の革命は、農民の農民による農民のための革命運動であり、中国全土を農村化しようとするものであった。彼は都市文明を完全に否定し、徹底的に近代化を阻止しようとした。

マルクスは資本主義の存在を認め、その発展の最高段階において共產主義が実現すると考えた。しかし、毛沢東はさらに過激だった。都市の存在を否定し近代化を否定することによって、資本主義の発生を未然に防ぐこと。それこそが、彼にとつての共產主義だったのである。

毛沢東が生きている間は、彼の思想は完全な成功を収めた。中国には、資本主義の芽すら生えてこなかったのである。しかし彼の死後、中国はあつてなく近代化を再開することになる。毛沢東の死とともに、中国共産党は死んだ。

現代中国の起源は満洲国にある。満洲から始まった近代化の波は、毛沢東の活躍によつて一時的にせき止められたものの、彼の死後その勢いを増し、今まさに中国全土を飲み込もうとしている。

しかしながら、現代においてもやはり、毛沢東思想は大きな意味を持っている。彼が投げかけた疑問を、我々は正面から受け止めるべきなのかもしれない。

満洲事変の軍事思想

1

満洲事変の意義について、もう少し述べてみたい。

満洲事変を起こしたとき、石原莞爾の頭の中にあつたのは、ナポレオン戦争であつた。ナポレオンはフランスの将軍であつたが、彼一代でヨーロッパ大陸をほとんど統一してしまつた。

その後、ナポレオンが勝負を挑もうとしたのは、イギリスであつた。大陸封鎖を行つてヨーロッパの意志を統一することで、海洋帝国であるイギリスを打倒しようとしたのである。大陸国家フランスと海洋国家イギリスの対決、という構図がここに見てとれる。

現代の日本人は日本を島国だと考えているようだが、そのような見方を続ける限り、歴史を正しく知ることはできないだろう。石原にとって、日本は島国ではなく、大陸国家であつた。

これはおそらく、彼の出身が山形であることも関係しているのだろう。日本海側は、古くから日本の玄関口であつた。大陸との交易が、北陸や山陰を中心に行われていたからである。もしも、満洲国の経営が軌道に乗り、満洲との交易が盛んになれば、日本経済の中心は日本海側になるはずであつた。日本は常に大陸とつながっており、大陸の一部である。歴史的には、そのような見方は自然なものであろう。

つまり、日本はフランスであり、アメリカはイギリスである。大陸

2

国家である日本が中国大陆を統一し、然る後、海洋国家であるアメリカとの戦争に挑むということ。その第一歩が満洲事変であつた。

このことに留意すれば、石原が、日中戦争をナポレオンのスペイン戦争になぞらえたことも、また、あくまでも中国との戦争に反対したことも、理解しやすくなるだろう。ナポレオンはイベリア半島に大軍を投入したが、戦争は泥沼化し、それが結局はフランスの敗北を招いたのである。フランス軍が彼の地で味わつた苦しみを、中国に踏み込んだ日本軍は確実に味わわれることになる。ゆえに、中国との戦争は絶対に避けねばならなかつた。

石原はナポレオンの失敗を研究し、日本が同じ過ちを繰り返さないことを望んでいた。大陸の力を結集すれば、必ず海洋帝国を打倒することができる。そのような信念が、彼を突き動かしていた。

満洲事変の前後で、日本という国家の姿勢は百八十度変わつてしまつた。それ以前の日本は、覇権主義的な国家の一つにすぎなかつた。西洋植民地主義の走狗と言われても、仕方がなかつた。

しかし、満洲事変以後の日本の歩みには、単なる植民地主義として片付けることのできない部分がある。東洋の盟主としての自覚が芽生えつつあつたと言ってもよいだろう。完全に改心したとは言えないまでも、大東亜戦争を、植民地の奪い合いのための戦争と考えることは適切ではない。日本人が唱えたアジアの解放という目標は、決して偽りではなかつた。西洋列強に対する敵愾心が、ようやく日本人の胸にも生まれてきたのである。ある意味では、それは遅すぎたのかもしれない。それでも我々は、十分に結果を残したと思う。

世界最終戦争

1

アメリカが戦争を始めるときには、一定のパターンがある。太平洋戦争の場合、真珠湾に攻撃を受けてから、日本に宣戦を布告した。アフガニスタン紛争は、九・一一に対する報復として始まった。アメリカはいつも、一度敵の攻撃を受けてから、それに反撃するという形で戦争を始めている。たしか米墨戦争でも、同じような経緯があったはずである。

おそらくこれは、自分の行為を正当化するために、必要な手続きなのだろう。自分の身を守るために暴力を振るう、という行為は、その正当性が誰にでも理解できるものである。アメリカは、このような自己正当化の手続きを経ないと、戦争を始めることができない。

よって、アメリカに勝つためには、最初の一撃でアメリカを焦土にするのが最も良い。そうすれば、自分を正当化する余裕もなくなり、戦争を始める前にアメリカの敗北は確定する。これが、世界最終戦争という考え方である。

2

一九四一年時点では、日本から直接、アメリカ本土を攻撃する手段がなかった。そのため、空母の行動範囲の限界であるハワイへの奇襲で満足せねばならなかった。これは次善の策であった。

当時の日本がとりえた最善の策は、アメリカ本土を直接攻撃できる技術が開発されるまで、戦争を避ける、というものだった。隠忍自重しつつ国力の涵養に努め、戦争の準備が整い次第、アメリカに総攻撃を仕掛ける。石原莞爾の予想では、だいたい一九七〇年位までには、そのような戦争が可能になるだろうと考えられていた。

具体的には、日本からアメリカまで補給無しで航行可能な新型航空機の開発と、核兵器や細菌兵器などの大量破壊兵器の開発、そしてこれらの量産体制が不可欠であった。これらの条件が揃わない限り、日本の勝利はありえなかった。

というのも、アメリカから日本へ侵攻する場合、太平洋の島嶼伝いに徐々に接近することが可能である。しかし日本からアメリカへは、侵攻する手段がない。アメリカは、国土そのものが難攻不落の要塞だったのである。これを攻略するための技術がなければ、日米戦争に勝つ見込みはない。それが石原の考えだった。

しかしながら、現在においては、そのような欠点は克服されている。核兵器の製造技術は確立され、大陸間弾道弾や巡航ミサイルの技術も存在している。我々は、適切な準備期間さえ設ければ、世界最終戦争を実行可能である。この戦争に比べれば、太平洋戦争はただの小競り合いにすぎない。

3

放射能の影響を過大評価するべきではない。長崎や広島には、戦後すぐに人が住み始めている。おそらく、全面的な核戦争が起きたとしても、人類が滅亡することはありえないだろう。人口は半分くらいに減るかもしれないが、十分に回復可能である。

むしろ、廃墟から立ち直る過程で、戦争の虚しさを実感し、平和な世界を建設する意欲が湧いてくるはずである。その想いは何よりも尊いものであり、それなくして、世界平和の実現は不可能である。

我々は、アメリカを焼け野原にするべきだった。そうすれば、世界はもう少し平和になっていただろう。我々は彼らを、遥かな過去の中に置き去りにしてしまったのかもしれない。

グアムと沖縄

1

現在の東アジアの平和を乱す最大の要因は、アメリカの軍事力である。米軍の存在がなくなれば、この地域の政治情勢は多少安定するだろう。ゆえに、我々は、グアムと沖縄からの米軍の撤退を要求するべきである。東アジアの秩序を維持することは、日本の義務である。もしもアメリカが、中国や北朝鮮に喧嘩を売るつもりならば、我々が代わりに受けて立たねばならない。

また、ロシアとの間に軍事同盟を結ぶ必要もあるだろう。日本は、アメリカの核の傘から、ロシアの核の傘へと移行する。いざとなれば、ロシアから核兵器を輸入することもできるかもしれない。さらに、北方領土に自衛隊の基地を作り、ロシア軍との合同演習を始めるべきであろう。

グアムはアジアの一部であり、米軍の存在を許すことはできない。これは、日本とアジア諸国の安全保障に関わることである。

しかし、我々は、アメリカに対して何らかの見返りを与えなければならなくなるだろう。それが何であるのか、今のうちから考えておかねばならない。

2

日本が核兵器を保有する場合、その使用は先制に限るべきである。他国の攻撃に対する報復としての核の使用は、いたずらに被害を大きくするだけで、何の意味もない。そのような、嫌がらせのための兵器の使用は認められない。

相互確証破壊の考え方は、日本に対しては意味をなさない。なぜならば、日本人が戦争に臨んで死を恐れることはないからである。そのことは、アメリカ自身が最もよく知っているはずである。

たとえば、アメリカ本土のミサイル防衛システムを大幅に強化したとして、それでどれだけのミサイルを防ぐことができるのか。百や二百は防ぎきれぬだろう。では、千や万のミサイルが一度に降ってきたとして、それを全て防ぐことができるだろうか。そのうちのパーセントでも打ち漏らしがあれば、我々の勝ちである。

我々が宣戦布告なしに、アメリカの主要都市に向けて先制核攻撃を行った場合、それを防ぐ手段があるだろうか。報復攻撃によってもそれを抑止できないとしたら、彼らに何ができるのか。しかし、もしも我々が、アメリカ人と共存することはできないと判断したならば、それは現実になるだろう。

アメリカはすでに負けている。現在の世界において、戦争ということはすでに意味を失っているのである。

もちろん、これが上手に行くかどうかは、このような日本の方針が国際社会、とくに中国とロシアの支持を得られるかどうか、という点にかかっている。ミサイルの製造が完了する前に日本の経済が崩壊すれば、日本の負けである。

また、アメリカには先制攻撃を行う能力はない。それは文化の問題である。アメリカ人は、自分たちが被害者でなければならないと考え

ている。だから、相手が先に手を出すまで、自分からは何もしない。彼らがそうするのは、すべての責任を相手に押し付けるためである。自分では何も決断せず、先に手を挙げる人間が出てくるのをじっと待っている。

アメリカ人は先制攻撃を避ける。それは卑怯で幼稚な行動であり、社会の秩序を乱す非常に危険な思考である。彼らは、戦争の責任を自分で引き受けようとせず、すべて他人のせいになろうとする。そういう無責任な人間は、どんなおかしいことでも平気でやる。全く信用できない人種である。

しかし、もしもアメリカ人が、日本に先制攻撃を仕掛けるだけの度胸を持つならば、それは、彼らが人間として成熟したということであり、それで十分である。そういう人間とは、話し合いが可能である。我々はアメリカ人の成長を望む。そのために必要ならば、核戦争も辞さない。

アメリカ人は、真珠湾における失態をよくよく思い返してみるべきである。次はハワイだけでは済まないだろう。

中国を封じ込める

1

チベットの存在には、地政学上の重要性がある。チベットの独立が達成されれば、日本とともに、西と東から中国を圧迫することができ。また、北にはモンゴル、南にはASEANがあり、これで包囲網は完成する。

我々は、チベットの独立を達成するために、台湾政府を利用するべきである。というのも、少しややこしい話になるが、清朝の最後の皇帝から禅譲を受けたのは、中華民国政府である。したがって、中国王朝の正統を受け継いでいるのは、中華民国であって、中華人民共和国ではない。もしも清朝がチベットを支配していたのだとすれば、その支配権はいまだに中華民国にあると言うことができる。

ゆえに、仮に台湾政府がチベットの独立を認めるならば、それは、中国人にとって非常に重大な意味を持つことになる。そのとき、それを認めない中国人がいたとしたら、彼は中国の歴史と伝統を否定することになるだろう。

日本政府は、台湾政府に、チベットの独立を宣言するよう働きかけるべきである。その宣言の後で、日本政府がそれを追認し、世界中にチベットを国家として認めさせる。このようなやり方で、チベットの独立を進められないだろうか。

1・1

たとえば、西遊記というお話の中で、お釈迦様は孫悟空の頭に金の輪っかをはめる。悟空が悪さをしようとすると、その輪っかが縮み、悟空を懲らしめる。私の提案は、中国人の頭に、このような輪っかをはめようというものである。中国を取り囲む諸国家・地域が連携して、中国の動きをけん制する。

そして、これら諸国の友好関係は、仏教を基調として育まれることになるだろう。中国の周辺地域に仏教が根付いているのは、偶然ではないように思われる。

日本という国には、世界平和を実現するだけの力がある。我々はそのことを認識しなければならない。

2

ポツダム宣言では、日本に対して、カイロ宣言の履行が義務付けられている。そしてカイロ宣言では、日本は、清国から盗取した満洲や台湾を、中華民国に返還する、ということになっている。これを言葉通りに解釈するならば、満洲と台湾を領有する権利は中華民国にある、中華人民共和国にはない、ということになる。

一方で、日中共同声明によれば、日本政府は、中華人民共和国が中国の唯一の合法政府であることを認めている。

そうすると問題は、清国政府が、中国の政府だったのか、という点にあることになる。つまり、清国政府が満洲人の政府であり、中国の政府ではなかったのだとすれば、これらの宣言や声明からだけでは、中華人民共和国が満洲と台湾を領有すべきことを、日本政府が認めているということにはならない。

そして、中華民国は、そのような満洲人国家としての清国の後継国家なのであって、単に中国の政府であるとは言えない。日本はカイロ宣言を履行することで、台湾と満洲を中華民国に返還したが、中華人民共和国に返還したわけではない。

ゆえに、この立場からは、満洲を盗取したのは中華人民共和国である、と言える。つまり、満洲は中国ではない、という立場からすれば、である。満洲人から盗んだものを、中国人に返すことはできない。

清国は満洲人の国家であり、中国はその植民地に過ぎなかった。清国は中国を包含する、中国よりもさらに大きな国家だったのである。清国皇帝は中国の皇帝を兼ねていたが、中国だけの皇帝であつたわけではない。彼は同時にモンゴル皇帝であり、満洲皇帝であり、また、チベット法王の施主として、チベットを保護する義務があつた。

この見方をとるならば、次に示すカイロ宣言の一文は不正確であると言わざるをえない。

“all the territories Japan has stolen from the Chinese, such as Manchuria, Formosa, and The Pescadores, shall be restored to the Republic of China”

文中の the Chinese は、正確には Qing (清) か the Manchu (満洲人) でなければならない。日本は下関条約によって、清国政府から台湾を割与されている。つまり、日本が台湾を割与されたのは、清国政府からであつて、中国人からではない。また、日本は非合法に台湾を領有したわけではないから、stolen という表現も不正確である。

これが単なる事実の誤認であるのか、それとも意図的な歪曲であるのかは、今は問わない。しかし、これらの表現が間違ひであることは明らかである。また、そもそもこの宣言には署名が欠けており、外交文書として扱うべきではない、という意見もある。以上の理由から、

カイロ宣言の有効性には疑問の余地があると言える。

中華人民共和国の主権は、南北モンゴル、チベット、東トルキスタン、満洲、台湾には及ばない。人民解放軍が、住民の同意なしにこれらの地域を占領することは、不法行為とみなされるべきである。

2・1

欧米人は、世界中至る所で紛争の種をまき、それによって自分自身を苦しめ続けている。愚かと言うのも愚かである。

キリスト教の倫理では、嘘つきを裁くことはできない。なぜならば、キリスト教の教義そのものが嘘だからである。だから、キリスト教徒は平気で嘘をつく。人間には嘘をつく権利がある、ということが全ての前提になっている。それが西洋文明の本質である。

しかし、そもそも彼らには、嘘をつくつもりはなかったのかもしれない。ただ、満洲人と中国人が区別できなかっただけかもしれない。だから、チベット人と中国人の区別もできないのだろう。そのような人々に口を出されれば、現場は混乱するだけだ。

西洋人はまず、自分の無知を自覚するべきである。この世に白色人種ほど、知恵の劣った人々はいない。

平和の利益

1

戦争が続いている状態よりも、平和な状態のほうが、社会全体の利益は増えるはずである。

たとえば、いま、コンゴで内戦が続いている。コンゴには豊富な鉱物資源があり、多国籍資本がその開発を行っている。しかし、鉱物を輸出することで得られる外貨は、すべて武装勢力の手に渡ってしまう。それが、コンゴの混乱の原因である。

だが、コンゴの社会情勢が不安定だと、鉱物の採掘量が安定しないだろう。すると鉱物の値段が安定せず、乱高下することになる。そうすると、その鉱物を利用して企業の方も、計画通りに製品を作れなくなり、損をすることになる。

一方で、コンゴの政治が安定していれば、鉱物の供給量も安定し、結局、企業も計画通りに製品を出荷できることになる。そのほうが、企業の利益も大きくなるだろう。

これを一般化すれば、平和が最大の利益をもたらす、と言えるだろう。もしも、私企業の目的が利益を最大化することなのだとしたら、私企業の目的は世界平和である。

2

コンゴに関して言えば、資源を開発して外貨を得ることは、悪いことではない。それを社会と経済の発展に使うことができる、一番良いのである。そのために必要なものは政治であり、コンゴ市民に政治を根付かせる必要がある。

その際に大切なことは、政治的なまとまりを作ることではないだろう。おそらく現在のアフリカの国境は、植民地時代にヨーロッパ人が勝手に引いたものであろう。それを基準にする限り、政治的なまとまりは作れないと思う。

人々の集まりは、共通の言語や文化を持っていることで、形成されやすくなる。したがってアフリカでも、国境にこだわらず、文化的な共通性を持つ集団が結束して、一つの政治単位を作るべきではないだろうか。そのような政治単位が集まることで、更に大きな集団を構成できる。

そのように、その土地の人々が自発的に政治を構築する以外に、アフリカに政治を根付かせる方法はないのではないか。その際、ひとつひとつの政治単位は、国境よりもずっと小さいサイズでよいと思う。そのような、意志が統一された社会集団があったほうが、支援をする方もやりやすいだろう。

すでにある国境にこだわる必要はない。アフリカの発展のためには、国民国家という枠組みを見直す必要がある。そのために、国連の役割も変化すべきだろう。

3

戦争について、もう少し言いたいことがある。

ときどき、自衛のための戦争ということを言う人がいるが、それは馬鹿げている。たとえ自衛のための戦争に勝ったとしても、自国を防衛できるだけで、得られるものは何もない。しかし、戦争とは金が掛かるものである。自衛戦争のために使った金は、誰が払うのか。

もちろん、国民の税金で賄うしかない。だが、それでは国が破産してしまうだろう。だから、自衛のための戦争などはもってのほかで、国を滅ぼすものである。戦争をするならば、少なくとも侵略戦争でなければならぬ。戦争で使った金を、相手から分捕ってこれるような戦争を行わなければ、採算が合わないのである。

しかし、先程も述べたように、最大の利益をもたらすものは平和である。したがって、平和を実現するために戦争を行うということは、理にかなっている。戦争は二つの国があるから起きるので、二つの国を一つにまとめてしまえば、戦争は起きなくなり、平和が実現される。そのための戦争が、最も良い戦争だろう。

平和は、あらゆる人間に最大の利益をもたらすものであり、その実現のためには、努力を惜しむべきではない。

3・1

術学的なことを言うならば、武力は、それ自身を否定するためである。自分の身を守るためにも、他人の身を守るためにも、武力は必要である。しかし、一たび平和が実現されてしまえば、武力は必要なくなる。だから、武力は、武力が必要ない世界を作るために使われねばならない。自己を否定することによって、それは価値を持つのである。

武力によってしか、平和を実現することはできない。非暴力によって達成される平和は、常に限定的なものである。しかし、自己を肯定する武力は、ただの暴力へと退化する。それは有害無益な存在と成り果てるだろう。

歴史とは何か

1

歴史に「もしも」は禁物だと言われるが、それは間違いである。ある個人や組織が、なぜその行為を行ったのか、ということは、もしもその行為を行わなかったらどうなっていたか、ということを考えることなしに、理解することはできない。

たとえば、一九一〇年に日本は韓国を併合したが、それはどうしてだろうか。

このことは、もしも日本が韓国を併合しなかったならば、どうなっていたか、ということを考えれば分かる。おそらくその場合、韓国はロシアの植民地になっていただろう。そうすると、日本海を挟んだ大陸側は全てロシアの勢力圏になってしまう、日本の国防にとって危機的な状態になってしまう。そのような事態を防ぐために、日本は韓国を併合したのである。

もちろん、そうならなかった可能性もある。韓国軍が自力でロシア軍を撃退する可能性もあったかもしれない。しかし、当時の日本人はそう考えなかったし、私も、そのような可能性はほとんどなかったと思う。

ふつう人は、未来のことを予測したうえで行動する。この後こうなるかもしれないから、今のうちにこれをしておこう、というふうに、

可能性を考えることで、何をすべきかを決めることができる。つまり、「もしも」という考え抜きに、人は自分の行動を決めることができない。

したがって、歴史というものが人間の行為の積み重ねである以上、「もしも」という考えなしに、歴史を理解することはできないのである。歴史は「もしも」の学問であり、また、そうでなければならない。

2

2・1

韓国は、日露戦争に勝利することで、日本が勝ち取った戦利品である。これに関して、我々は誰に恥じる必要もない。

もちろん、我々が韓国で行った同化政策は誤りであったし、韓国人の自治を認めなかったことも誤りであった。それが人々に与えた影響を、忘れてはならない。我々は韓国人から言葉を奪ったのだ。

一方で、ロシアの膨張を防ぐことができたのは、日本にとって大きな成果であった。ロシアとの関係を考えるならば、韓国を手放すという選択肢はありえなかった。

2・2

また、ロシアが韓国を侵略しないという可能性はなかったのか、と言う人がいるかもしれない。

そんなことはあるはずがない。だいたい、世の中の悪いことはみんなキリスト教徒が作ったのであって、彼らの好きにさせておいたら、どんなにひどいことになるか知れたものではない。

現代の日本人は、イギリス人やフランス人を天使のようなものだと思っているらしいが、そんなわけではない。彼らは、自分の利益のためならどんなことでもするような獣だったのであり、いまでも幾分、そのような部分が残っている。我々が大東亜戦争によってアジアを植民地支配から解放するまで、彼らはアジア人の生き血をすすって生きていたのである。あの戦争によって、彼らも少しは懲りたようだが、まだ本当の意味で反省しているわけではない。

欧米人は自分の間違いを指摘されると、相手の落ち度を責め始める。相手の落ち度を見つけたら、それで自分の間違いは許されると思っているのである。だからいつまでも反省しない。日本人が欧米の植民地支配を非難すると、彼らは日本の侵略戦争の話を持ち出す。しかし、あの戦争は植民地支配を打ち破るためのものだったので、そもそも欧米人が植民地を作らなければ、我々があんな戦争をする必要もなかったのである。

欧米人には、原因と結果のつながりを認識する能力が欠如しているようである。そして最後には、神様とかAIとかの不思議なものが現われて、全ての問題を解決してくれると思ひ込んでいる。お気楽な連中である。だが、現実はそのなにごとに甘くない。いずれツケを払うときが来るだろう。

日本人は、ひとり日本のためにのみ戦ったわけではない。日本などという、ちっぽけな国のために戦ったわけではない。我々は世界の平和のために戦った。正義のために戦ったのである。

2・3

また、西洋人がときどき示す、我々が優れた文明を教えたやっただから、あなた方は我々に感謝すべきだ、という態度も、心得違いで

ある。

我々は確かに、彼らがもたらした科学技術から多くを学んだ。だから我々は、ニュートンやアインシュタインに敬意を払う。しかし、だからといって、ヒトラーやルーズベルトにまで敬意を払わねばならない理由はない。

他方で、彼らがもたらした政治思想や哲学は、我々の社会に混乱を招いただけであった。それは社会の進歩に対して、何ら本質的な寄与を行っていない。実際、西洋文明と接触して以来、我々は何度も大きな戦争に巻き込まれてきた。客観的に見れば、それが我々に与えた恩恵よりも、損害のほうが圧倒的に大きい。

つまり西洋文明は、我々にとって災厄以外の何物でもなく、感謝すべき理由など少しもない。むしろ、我々が西洋人を正しい道へと導いてやったのだから、彼らの方こそ、我々に感謝するべきである。西洋人の考えはかくも混乱しており、事実を全く誤認している。

大東亜戦争の真意

1

大東亜戦争は、日本の侵略戦争だったと考える向きがある。たとえば、日本軍はビルマを占領し、日本による支配体制を確立しようとした。それが、日本の植民地支配の意図を証明している、という意見がありうるだろう。

しかし、もしも日本軍が、ビルマからイギリス軍を排除した後に、ビルマの防衛態勢を整えなかったとしたら、どうなっただろうか。その場合、イギリス軍が何の抵抗もなくビルマに戻ってきてしまうだろう。つまり、自軍が占領した地域において、その支配体制を確立し、防衛態勢を整えるということは、戦争を遂行するために必要な手続きだと言える。ゆえに、その事実だけをもって、日本に植民地支配を始める意図があった、と断定することはできない。

日本はアジアの解放を目的として大東亜戦争を始めた。それは日本政府の本心であって、偽りではない。明治維新によって近代日本が誕生したとき、アジアはすでに欧米列強の支配下にあった。東南アジアはほとんどすべて植民地とされ、中国も列強の影響下にあった。つまり、日本という国家は、初めから不利な状況に置かれていたのである。このように、マイナスからスタートしたものを、ゼロに戻すことができれば、相対的にはプラスになる。つまり、アジアから欧米の勢力

を取り除き、アジアの独立を達成できれば、それだけで、日本にとっては大きな利益になるはずである。日本の利益を確保するために、わざわざアジアを植民地にする必要はなかった。ゆえに、アジアの解放という日本政府が掲げた目的は、真実であったと考えることができる。また、その目的は、日本側の実際の行動と全く矛盾しない。むしろ、植民地支配が目的であったと考えることで、日本側の行動が説明しにくくなる場合もあるだろう。

では、どうしてあの戦争が、植民地獲得のためだったと考えられているのだろうか。

それは、欧米人の潜在意識が、日本人の上に投影されているからである。欧米人にとって、アジアは植民地支配の対象でしかなかった。だから、日本の戦争行為も、そのためだとしか考えられなかったのである。欧米人の目には、大東亜戦争は侵略戦争と映った。しかし日本人はたしかに、アジアの解放を目指していたのである。

また、アジアの解放ということは、欧米の支配からの解放を意味しており、それ以外の含みはない。したがって、アジアの人々に犠牲を強いることは、必ずしも、アジアの解放という目的と矛盾するものではなかった。日本人と、日本人以外のアジア人の利益は、一致することあれば、相反することもある。欧米の勢力を駆逐するという点に関しては、両者の利害は一致したが、そのやり方には不満が残ったと言えるだろう。

戦争の性格が以上のようなものだったため、モンゴルやチベットなど、欧米の勢力がほとんど進出していなかった内陸地域においては、日本軍の活動は負の影響しか残さなかったかもしれない。これらの地域が抱える問題の解決は、今後の課題である。大東亜戦争はまだ終わっていない。

2

また、ポツダム宣言の読み方にも注意が必要である。たとえば第十項では、日本人を奴隷化する意図はない、と述べられている。だが、本当にそういう意図がなかったのだとすれば、それをわざわざ口に出す必要はない。つまり、アメリカをはじめ、日本人を奴隷化する意図をもって戦争を始めたのだろう。しかし、思ったよりも日本人が強かったため、それが不可能であることが分かった。だから、日本人の奴隷化は諦めます、という意味である。

このように解釈しないと、ポツダム宣言は意味が通らない。やたら高圧的なわりに、表現があいまいで意味がとりにくいのは、アメリカ側の態度の変化を隠すための工夫だろう。アメリカは戦争遂行の途中で、目標の達成が不可能なことを悟り、それを取り下げざるをえなくなった。つまり、事実上、アメリカは降伏せざるをえなくなったのである。それがポツダム宣言なのだが、アメリカには謝罪という文化がないので、非常に難解な文章になっている。アメリカ側が折れた、という事実を隠すためのレトリックに満ちている。

たとえば、「日本国ノ主権ハ本州、北海道、九州及四国^{ナラビ}竝ニ吾等ノ決定スル諸小島ニ局限セラルベシ」という有名な第八項は、それら諸小島がどれを指すのが決定されていないので、実際には無意味な条文である。このように、ポツダム宣言には具体的な内容が欠けており、アメリカ政府からの和睦の申し入れ以上の意味はない。

では、どうしてこの時になって、アメリカは態度を変えたのだろうか。それは、ルーズベルトが死んだからである。そのように実現不可能な目標を設定して戦争を始めたのは、ルーズベルトである。当の独裁者が病死したので、副大統領であったトルーマンが次の大統領となった。しかしトルーマンには、日本を侵略するつもりはなかった。

アメリカでは大統領の権限が非常に強いので、大統領の交代にともなって、政府の外交方針がガラッと変わることがある。この場合も同様で、ルーズベルトからトルーマンへと大統領が交代したことによって、アメリカ政府の方針が、日本の侵略から日本との講和へと、百八十度転換したのである。つまり、ルーズベルトの死によって、日本に平和がもたらされたと言える。

適切なたえではないかもしれないが、もしも、ダンケルクの戦いの最中にヒトラーが死んでいたならば、そこで戦争は終わっていたかもしれない。それに相当する事態が、太平洋戦線では起きていた。これを神風と呼ぶべきかどうか、私には分からない。

太平洋戦争は、事実上日本の勝利であった。しかし、名目上はアメリカの勝利にすることとて、手打ちとなった。だから、戦後のGHQの占領は、日本人の目には約束違反と映った。日本の降伏は建前であって、実際には休戦協定を結んだだけである。しかし、アメリカ人にはそれが理解できない。彼らは、本当に自分たちが勝ったと思いつ込んでいた。

3

日本人の誇りを守るために、我々は徹底的に抗戦を続けることもできた。しかし、日本政府は終戦を選択した。その理由は、畏くも天皇陛下が、終戦の詔において仰せられたとおりである。このまま争いを続けても、日本人のためにもならないし、また、他の誰のためにもならない。天皇陛下は、世界と日本の平和のために、自ら矛を収めるという決断を下されたのである。まことに尊いご決断であった。

アメリカの参戦

1

どうしてアメリカは第二次大戦に参加したのか、ということは、現代史における一つの謎である。当時アメリカは中立を宣言しており、戦争に参加する理由はないように思えた。ナチスドイツとの関係も悪くはなく、ヒトラーはむしろアメリカとの戦争を避けようとしていた。また、アメリカ国民も戦争に反対しており、自国が中立を保っていることに満足していた。

一方で、アメリカが参戦する以前に、アメリカ海軍の駆逐艦が、ドイツの潜水艦を爆雷によって攻撃するという事件が起きていた。これは明らかに、ドイツ軍への挑発であった。

つまり、アメリカ政府は、公には中立を宣言し、そして、国民もそれを支持していたものの、実際には戦争を望んでいた、ということになる。問題は、それが何のためだったのか、ということである。

根強く支持されている仮説として、アメリカの第二次大戦への参戦は、ドイツの脅威からイギリスを守ることが目的だったのだ、というものがある。この説によれば、ルーズベルトは、アメリカ最大の同盟国であるイギリスの危機を救うために、わざと真珠湾攻撃を成功させた。つまり、ドイツが挑発に乗らなかつたので、代わりに日本を挑発することにしたのである。アメリカは日本と戦争を始めることで、自

動的に、日本と同盟を結んでいたドイツとも戦争を始めざるをえなくなる。反戦の世論を抑えて国民を戦争に引きずり込むためには、そうするしかなかった、という考えである。

このストーリーは、一見筋が通っているように見える。唯一の欠点は、どうしてアメリカがイギリスを助けようとしたのか、という動機が欠けていることである。自分の命を懸けてまで、イギリスのために戦おうとするアメリカ人が、本当に存在したのだろうか。

アメリカの歴史は、イギリスとの対立の歴史である。ゆえに、アメリカ国民のイギリスに対する印象は、それほど良いものではなかったはずである。イギリスやヨーロッパがどうなろうと、それを気にかけずアメリカ人は少数派であつただろう。

このような事情を考慮に入れると、アメリカはヨーロッパを救うために戦争を始めた、というストーリーには、あまり説得力がないように思える。たとえルーズベルト個人が、並みのアメリカ人以上にヨーロッパに思い入れがあつたのだとしても、それだけで戦争を始める理由になるかどうかは疑わしく思われる。むしろ、アメリカは、日本との戦いを始めるためにヨーロッパの戦争を利用した、と考えるほうが自然ではないか。

アメリカは、太平洋の覇権を完全に手中に収めるために、日本との戦いを企んでいた。そのために、日本と同盟関係にあるドイツとの開戦を望んでいたのである。このストーリーは、十九世紀以来アメリカが追求してきた、太平洋における膨張政策とよく一致している。そして、現代の世界において、このストーリーが語られなくなった理由もはっきりしている。実際には、アメリカは、太平洋の覇権を手にし損ねたからである。

もちろん、日本との同盟関係によって、アメリカの覇権は確立され

ているように見える。しかし、そもそもアメリカが望んでいたのは、そのようなものではなかった。それは、米比戦争を思い出せば分かることである。アメリカの帝国主義と人種差別がどこまで野蠻になりうるかは、世界中の誰もが知っている。本当は彼らは、日本を征服し、完全に自分たちの支配下に置きたかったのである。ところが現実はその上手くは行かず、日本の独立を認めざるを得なかった。今は日本人の好意によって、かろうじて覇権を手に行っているに過ぎない。

つまり、このストーリーにおいては、アメリカは敗北したことになるのである。だからアメリカ人は、イギリスのために戦った、というストーリーを選ぶしかなかった。そうすれば、アメリカが勝ったことになるからである。

アメリカ政府のプロパガンダ能力はすごいもので、負けた戦争でさえ、勝ったことにしてしまう。そのためアメリカ人は、自分たちが負けたことにさえ気付かない。歴史上最も愚かな国民である。

2

しかしこれに関しては、日本も共犯である。日本人は、自分たちが負けたふりをするので、アメリカ人をだましてきたのである。日本がアメリカに対して従順であるのは、ある意味で、アメリカをコントロールするためであろう。

アメリカ人は、日本人の従順さを受け入れざるをえない。なぜならば、アメリカは勝者だからである。もしも、アメリカが日本を敵視するならば、彼らの勝利そのものが幻と消えてしまう。ゆえに、アメリカが勝者として振る舞い続ける限り、彼らは日本に対して敵対的な行動をとることができない。

さらに、日本の武装解除はアメリカが望んだことであり、憲法九条もアメリカが日本に押し付けたものである。それは彼らの勝利の証である。したがって、アメリカが勝者であり続ける限り、日本は戦争をする必要がない。また、日米同盟の片務性に関して、アメリカが日本に文句を言うのは筋違いである。なぜならば、日本に武装解除を迫ったのは、当のアメリカだからである。

そもそも日本は、戦前も戦後も一貫して自由主義国家であった。もしもアメリカが、日本と協力して共産主義と戦う、という決断をしていれば、共産主義との戦いはずっと楽なものになっていたはずである。しかしあの戦争の結果として、日本は武装を放棄し、共産主義と戦う必要がなくなってしまった。我々が何もしなくても、アメリカが勝手に戦ってくれるのだから、こんなに楽なことはない。我々は、アメリカ人の愚かさに感謝しなければならない。

彼らは、自分で自分を不利な立場に追い込んでいったのである。そして、そのような自縄自縛が日本に利益をもたらした。我々は、アメリカとの争いからも、共産主義との戦いからも解放され、経済的な繁栄を謳歌することができた。

それは、我々の罪だろうか。もちろん違う。彼らが、自分で自分をだましただけなのだ。

しかし、日本もそろそろ、国際社会における責務を果たしても良いところである。アメリカの衰退は明白であり、アジアを敵に回す力はいくら残っていない。日本が自らの立場を明確にするならば、アメリカは降参するしかないだろう。

2・1

また、ルーズベルトがスターリンにだまされたのは、おそらく目先の利益に踊らされたためだろう。スターリンは、ルーズベルトの日本征服計画に協力すると申し出て、まんまとルーズベルトの信頼を得た。その結果として、ソ連は、アメリカから自国に有利な協定を引き出すことに成功したのである。しかし、スターリンがどこまで本気だったかは分からない。満洲が取ればいくらいに考えていたのではないか。

何かを欲する者は、それに関してだまされる。お金が欲しい者はお金に関してだまされ、覇権が欲しい者は覇権に関してだまされる。ルーズベルトがスターリンにだまされなければ、アメリカの覇権はもう少し強固なものになっていただろう。

2・2

ここで、沖縄戦の価値と、米軍基地問題について、少し考えてみたい。

沖縄における日本軍の抵抗は激しかったが、最終的に日本側の降伏で戦闘は終了した。それからアメリカ軍による占領が始まり、一九七二年に日本へ返還されるまで、それは続けられた。しかし本土復帰後も、沖縄には多数の米軍基地が存在し続けている。

そのような米軍基地の問題が、一方にはある。他方で、沖縄戦の最中に、住民の集団自決や、日本軍による住民の殺害が起きていたとされ、それを問題視する人も多い。彼らは一般に、日本軍の残虐さとアメリカ軍の人道性を強調する。

しかし、もしも彼らの言う通り、日本軍の残虐性だけが問題なのだとしたら、沖縄県民はどうして苦しんでいるのだろうか。アメリカ軍がそれほど優しい人々であるならば、アメリカの軍政に移行したことで、沖縄県民は幸せになったのではないか。残虐な日本軍から解放されて、慈悲深いアメリカ軍の手に渡ったというのに、どうして沖縄県民は、いまだに苦しんでいるのか。

沖縄における集団自決を非難しながら、アメリカ軍基地をも非難するというのは、不誠実な態度である。集団自決そのものが戦略的に正しかったかどうかは、ここでは議論しない。しかし、日本を防衛する上で、沖縄における奮戦が何の役割も果たさなかったとは言えないだろう。もしも本土が、沖縄と同じようにアメリカ軍の手に落ちていたならば、日本は完全に植民地にされていただろう。その場合、日本人が味わったであろう苦しみは、今の沖縄県民とは比較にならないものだったろう。沖縄は、自らの身を挺して、日本を守ったのである。

ゆえに、沖縄県民が日本政府に要求すべきことは、ただ一つである。それは、アメリカとの戦争である。今度こそアメリカに勝って、はやく沖縄を開放してほしい、そう要求するべきではないのか。日本は沖縄のために何度でも戦う、と、どうして言えないのか。

アメリカ人は野蠻ではない、という主張には何の根拠もない。ベトナムやイラクを見たあとで、どうしてそんなことが言えるのか。団結した人々の間に不和の種をまき、仲違いさせて力を削ぐ。それがアングロサクソンのやり方である。何度だまされれば気が付くのか。沖縄戦の最中にルーズベルトは死んだ。それが、この戦いの価値である。

2・3

戦争とは結局、大将首の取り合いである。太平洋戦争の場合、アメリカは天皇の首を取り損ねた。そして、アメリカが攻めあぐねている間に、彼らの大将首が勝手にもげてしまった。それで、なし崩し的に日本の勝利となったわけである。

また、第二次世界大戦の結果、得をしたのはソ連と日本である。戦後、ソ連は世界を二分する覇権国家の一つになり、日本は空前の経済発展を遂げた。一方で、イギリスとアメリカには損失しかなかった。イギリスは植民地を失い、覇権国家の座から転落した。アメリカは共產主義という強大な敵と、長い持久戦を戦わねばならなくなった。

互いの得失を勘定すれば、どちらが勝者で、どちらが敗者であるかは明らかである。しかしながら、ソ連は既に存在しない。したがって、日本が唯一の戦勝国である。

東京裁判は勝者の裁きではない。あれは、敗者が勝者を裁いているのである。まさに茶番と云うしかない。

2・4

極東国際軍事裁判においては、

(イ) 平和に対する罪

(ロ) 通例の戦争犯罪

(ハ) 人道に対する罪

という三つの罪が規定され、判決が下された。もしも、これらの項目が普遍的な罪として認められるのだとすれば、我々は、この法をあらゆる戦争に対して適用しなければならぬ。また、その犯罪が重大なものであるならば、被疑者が死亡している場合でも、調査が行われる

べきであると私は信じる。さらに、これらの法は事後的に適用することが許されるので、アメリカの場合、植民地時代にまで遡って調査を行わねばならない。

(イ)の平和に対する罪には、宣戦布告を行わない侵略戦争が含まれる。したがって、北米入植者によるインディアン虐殺と、彼らが居住していた土地の占領は、この罪の対象となるだろう。

また、(ハ)の人道に対する罪では、人種的理由にもとづく迫害行為や奴隷化が、犯罪として規定されている。これは、インディアンへの迫害および、同時期に行われたアフリカ原住民の奴隷化に対して適用されるだろう。

もちろん太平洋戦争に関しても、アメリカ政府内部で謀議があったかどうか、また、広島・長崎への原爆投下が人道に対する罪に当たるかどうかなど、調査すべき点が多い。当時の陸軍長官スティムソンが日記に書き残した、「問題は、相手から先に攻撃の矢を射かけさせるように、どうやって仕向けるかだ」という言葉は、共同謀議の証拠になりうるのではないか。そうであるならば、当時のアメリカ政府の高官たちには、平和に対する罪の疑いがある。平和に対する罪は、死刑または終身刑に相当する。この調査を進めるにあたって、我々は、アメリカ政府に証拠の提出を要求しなければならない。

そもそも、これらの法によって日本側のみが裁かれ、アメリカ側が一切裁かれていない、ということがおかしいのである。法の下平等という原則が踏みにじられている。アメリカ自身が、戦争行為が犯罪として裁かれることを示したのだから、彼らが犯した罪は、最も厳しく追及されねばならない。アメリカ人は、法の精神を理解しなければならぬ。

東京裁判は、ある意味では奇貨である。そこで示された法に基づい

て、判決が下され、実際に刑が下されたということは、それらの法に現実の力があることを証明している。そして、刑を下した連合国は、その法の正しさを否定することができない。我々は、これを存分に利用せねばならない。

3

3・1

今後日本が、私がここで述べたような反アングロサクソン、反キリスト教的な外交を展開しようとしたときに、一番の不安材料となるのは、南米諸国かもしれない。南米にはキリスト教が根付いており、しかもアメリカの影響力が大きい。彼らがどれだけ、アメリカから独立した政治判断を下せるか、予想が難しい。この点に関しては、フィリピンも同様である。フィリピンは東南アジアではなく、政治的には南米に属しているように見える。

過去数世紀にわたって続く南米の政治的な混乱の原因は、キリスト教である。キリスト教は社会の構造を破壊し、文化を破壊する。政治的に安定した社会を実現するためには、キリスト教の撲滅が必要不可欠である。

キリスト教は断固として否定されねばならない。これは、私の政治的な信念である。

3・2

では、ロシアはどうか。ロシアもキリスト教国であり、我々が反キリスト教の立場をとるならば、ロシアとの協力も難しいのではな

いか。

私は、ロシアとの協力は可能だと思う。ロシア人はもともと、モンゴル人の一種のようなものである。彼らは、宗教の問題よりも、内地域における政治的な安定を優先せざるをえない。

ロシア人は一見、イデオロギーによって行動しているように見える。だが、その本質はむしろ権力の追求にあると思う。共産主義は、権力の集中を可能にするから、ロシアで成功を収めたのであって、イデオロギーそのものが問題だったわけではない。様々な民族をひとつの権力の下にまとめることができれば、イデオロギーは何でもよいのである。それが多民族国家ロシアの本音であり、その政治的な姿勢はモンゴル帝国と変わらない。

だから、ロシアの対応には、ある程度の柔軟性があるだろう。彼らは主義主張や原理よりも、実際の問題を優先する。お互いの利害が一致すれば、協力は不可能ではない。

3・3

少し説教臭くなるが、日本人はもっと、ロシアについて知る努力をするべきである。多くの日本人は、イギリスやフランスの歴史には詳しいが、ロシアの歴史は何も知らない。まず、お互いの理解を深めなければ、協力関係を築くことはできない。

ピョートル大帝の話などは、幕末や明治のころにも似ていて、日本人にも受けると思う。ロシアはもともとアジアの国であるが、ピョートルの時に西洋化を推し進め、国家の大改造を行った。対外的には膨張政策をとり、領土の拡張に努めた。その結果、西欧列強と肩を並べる大国に成長したのである。そういう意味では、日本と非常によく似た経験を持つ国である。

また、ロシアは寒い。極寒とも言える環境の中で生活しているロシア人は、常に暖かい土地にあこがれている。彼らにとっては、北海道でさえ南国の樂園である。彼らの南方への拡張は、あるいは生物の自然な欲求なのかもしれない。だから彼らは、一度手に入れた温暖な土地は絶対に手放そうとしないし、それを認めれば、さらに多くの土地を要求してくるだろう。それはあたかも、飢えた犬が鳥の骨にかじりついて、決して離そうとしないようなものである。ゆえに、領土問題に関して、ロシアに譲歩してはならない。代わりにヒートテックでも与えておけば十分だろう。

日本にとっての北方領土は、ロシアにとっては南方領土である。それを肝に銘じておかねばならない。

ナチスとヴェルサイユ

1

ナチス政権が生まれたのは、ドイツ人が特別に残酷だったからではない。英米仏の愚かさ、ヴェルサイユ条約がヒトラーを生んだのである。

基本的には、ナチズムは間違っていないかった。不条理な国際体制に対する反発という意味でも、強力な国家の建設という意味でも、決して間違いではない。ただ、我々に理解できないのは、彼らが行ったユダヤ人の虐殺と、ロシアとの戦争である。

特に、ロシアとの戦争にどんな意味があったのか、私には全く分からない。ナチスの原点であるヴェルサイユ体制の構築に、ソヴィエトは積極的に関わっていたわけではない。それなのにヒトラーは、むしろイギリスやアメリカに親和的で、ロシアを敵視していた。もちろんそこには、共産主義に内在するユダヤ的な要素が気に入らなかった、という理由もあったのだろう。

しかし、日本人の感覚からすると、ドイツのロシアへの攻勢は不合理としか思えない。むしろロシアと協力して、英米と対決するほうが自然ではないか。ここには、理屈では説明できない動機が隠されているように見える。

2

アングロ・サクソンの操る魔力というのは、おそらく差別の力だろう。ドイツ人は、イギリスやフランスの洗練された文化に対して、下品で野蛮な文化しか持っていないと思わされてきた。そのような英仏への劣等感と憧れが根底にあり、それが、単純な憎しみではない、アンビバレントな感情をドイツ人の中に作り出していた。

たぶんヒトラーは、イギリスに認められなかったのだろう。そのために、自分たちよりも野蛮な相手を見つけ出し、それを征服することで、自らの優秀性を証明しようとしたのではないか。イギリス人はドイツ人を差別し、ドイツ人はさらにユダヤ人やロシア人を差別する、そのような差別の連鎖構造が、ヴェルサイユ体制の本質だったのである。

ゆえにユダヤ人虐殺の責任は、ヒトラーだけではなく、ウッドロー・ウィルソンやロイド・ジョージも等しく負わねばならない。あのような大惨事の責任を、ひとりヒトラーにのみ負わせ、それで事足りるとするのは、あまりにも不誠実な態度である。

私が勝手にまとめるならば、ユダヤ人の虐殺は、ヨーロッパ文明の有する暴力性の結果である。ドイツ人だけが特に野蛮だったわけではない。ヨーロッパ文明そのものが野蛮だったのである。

3

また、ナチス・ドイツの行った政策に関して、日本を非難するのは的外れである。

たとえば、日本とイギリスが同盟を結んでいたからといって、イギリス政府の政策すべてに日本政府が同意したことはならないし、ま

た、イギリス政府の政策決定に日本が関与したことにもならない。ただ、条約が規定する範囲で行動を共にしただけである。

それと同様に、日本がナチス・ドイツと同盟を結んでいたからといって、ドイツ政府の政策決定に日本が関与していたとは言えないし、また、それに対して責任を負うものでもない。三国同盟は基本的に軍事同盟だったのであり、ユダヤ人を虐殺するための同盟ではなかった。

それを知りながらなお、ドイツ政府の政治に関して日本を非難するのであれば、それは恥知らずと言うしかない。

明治憲法と日本の国体

1

明治憲法は立憲君主制を謳っていると言われるが、私には専制君主制であるように見える。なぜなら、陸海軍を統帥するのは天皇であると、はっきり規定されているからである。しかし、実際に天皇が憲法どおりの振る舞いをしたことはなかった。おそらく維新の元勳が生きていたころには、阿吽の呼吸で国政が行われていたのだろう。そのため、この矛盾が表面化することはなかった。だが、彼らがいなくなると、明治憲法と現実の政治とのギャップを覆い隠すことができなくなってしまう。憲法が規定する天皇の大権は、本当に存在するのだろうか。それはいつになったら発動されるのだろうか。この問題は、昭和初期の日本の混乱と密接に結びついている。

昭和天皇は軍事に口を出すことをしなかった。しかし憲法によれば、統帥権を持っているのは天皇だけである。したがって、昭和初期の日本には、実質的に統帥権が存在しなかったことになる。陸海軍の指揮権が宙に浮いてしまった。これが、いわゆる日本軍の暴走の原因であり、昭和日本が克服しなければならぬ課題だったのではないだろうか。

2

軍の統帥権は天皇が握っている。しかし、天皇に軍事的才能があるわけではない。このため、一時的な措置として、天皇以外の人間に統帥権を預ける仕組みが必要だったのではないだろうか。つまり、将軍システムである。

これは私の妄想でしかないが、石原莞爾を征夷大將軍に任命して、満洲と朝鮮を預ければよかったのではないか。そうすれば彼は中国を平定し、さらに西へと進んだであろう。歴史的な経緯から言って、日本の天皇には日本列島に引きこもろうとする傾向がある。そのような天皇家と日本国家の性格が、明治以来の大陸進出政策と衝突を起こしていた。これを解決するために、日本古来のシステムを利用するべきだったのではないだろうか。

日本人は馬鹿正直であるために、憲法を順守しようとするが、べつに憲法に縛られる必要はない。私が思うに、法治主義という思想は間違っている。全ての人間が法律に従わねばならないのだとすれば、誰が新しい法律を作るのか。誰が古い法律を廃止するのか。法治主義は実現不可能な考え方であり、常に正しいわけではない。昭和日本が克服すべきだったのは、法治主義という思想そのものだったのではないか。

大日本帝国は天皇親政でこそなかったが、それでもなお、天皇が果たした役割は重大であった。もしも秩父宮が天皇になっていれば、日本は全く別の歴史を歩んでいたであろう。アメリカ人は君主制を嫌悪するあまり、過去にさかのぼって君主制の存在そのものを否定しようとする。しかし、我々は、そのような見方に与すべきではない。歴史においてそれぞれの個人が果たした役割を、正當に評価しなければならない。

3

石原莞爾は帝国軍人の分を守り、国体への不満を漏らしたことなど一度もなかったし、そんなことは考えもしなかっただろう。しかし、彼の中には確かに、統帥権への欲望があったように思われる。

ナポレオンの研究者として、彼のような独裁者になりたい、と思うこともあったかもしれない。だが、彼は結局何も言わなかったし、独裁者になろうとはしなかった。そこに、帝国日本の優れた精神性があつたと私は思う。

石原莞爾は恥を知る人であり、自分の本心は決して口に出さなかったのだろう。

法治主義

1

法治主義とは、暴力による支配である。法を破った者を暴力によって処罰することで、法の下での秩序が保たれる。対外的にはこれが、覇権主義の形をとる。国際問題を解決するために暴力を用いるということは、結局、国内における法治主義を対外関係にまで延長したものに他ならない。法治国家にとって戦争は、内政の延長である。法の支配が正当化される限り、戦争そのものを否定することはできない。

つまり、法治主義こそが戦争の原因である。この世界に法治国家が存在する限り、戦争がなくなることはないだろう。

また、法の支配とは、神による支配を意味している。神の支配を地上において実現するための手段が、法の支配である。そして、西洋人の信じている神が暴力を好むので、法治国家は暴力的なものにならない。野蛮な思想である。

2

政治とは結局、分業の一種にすぎない。人間が社会生活を営む上で発生する様々な利害対立の調整を、一部の人間が肩代わりすることによって、他の人々が自分の仕事に専念できるようにすることである。

それは、為政者がそれ以外の人々を支配する、ということの意味するわけではない。

アリストテレスは政治を棟梁的な仕事と呼び、政治学の中に支配・被支配という観点を持ち込んだ。しかし、それは、政治を理解するために必ずしも必要な観点ではない。政治は権力や支配に関するというよりも、むしろ利害の調整に関するものではないだろうか。

私見を述べれば、政治とは修身である。それぞれの人間が自分の行動を自分で律することができれば、それだけで国は治まる。その場合、社会のルールは特に必要ない。

3

また、おそらく、日本の政治を支えている理念は、民主主義ではない。石原莞爾の言葉を用いるならば、それは統制主義と言うべきものである。統制主義とは、自由主義と全体主義の中庸である。

全ての人間が、他人のことを考えずに勝手気ままに振舞うようになれば、社会の秩序は維持できなくなるだろう。そうなると、個人の自由を保証することは、かえって難しくなる。そこで、個人の自由を保証するために、ある程度の社会的な統制を行う必要が出てくる。それによって、単なる自由主義よりも、さらに積極的に個人の自由を引き出すことができるようになる。これが、統制主義という政治理念である。

多分、戦後の日本政治を導いてきた理念は、このようなものだったのではないだろうか。それは純粋な民主主義ではなく、むしろ、それよりも優れていたはずである。

日本の近代

近代とは何か。近代は、工業化と資本主義、それに対抗する思想としての共産主義など、様々な要素によって特徴づけられる。

共産主義が歴史に現れるに際して、日本は重要な役割を果たした。日露戦争における日本の勝利がロシア革命を引き起こし、ロシア帝室の権威を低下させた。その後、第二革命によってロシア帝国は滅ぼされ、ソヴィエト政権が成立した。つまり、日本の存在がなければ、共産主義国家が世界に出現することはありえなかったのである。したがって、近代という時代が形成されるにあたって、日本は積極的にその役割を果たしたと言える。

次に、いわゆる進歩史観と言われるものの起源について考えてみたい。歴史は進歩するものであるという考えは、ヘーゲルの中にも見られる。しかし彼が説いたのは、精神の自己発展としての歴史であり、非常に回りくどく、分かりにくいものである。それは、進歩史観という言葉によって我々が想起するイメージからは、かけ離れているように思われる。

過去から未来へ向かって、歴史は進歩を続けて行く。このような単純な観念は、ヨーロッパの思想家の中には見出しえないものである。むしろ我々は、次のような文章に進歩史観の原型を見出すのではないだろうか。

宮沢賢治の『なめとこ山の熊』という童話の中で、作者は次のように独白する。

「けれどもこんないやなずるいやつらは世界がだんだん進歩するとひたひたで消えてなくなっていく」

小十郎という猟師が獲ってきた熊の毛皮を、安く買い叩こうとする商人に対しての言葉である。ここには、世界が進歩するという観念が、非常に単純な形で表現されている。このような、進歩に対する素朴な信念というか信仰というものは、日本人に特徴的なものではないだろうか。

我々は進歩史観というものを、ヨーロッパに由来するものだと思っ込んでいた。だが、実際はそうではない。それは、日本において形成された思想だと考えられるのである。

そして、その起源をさらに尋ねるならば、我々はそこに法華経の精神を見出す。世界が一つの完成に向かって進歩を続けるという観念は、法華経において示される、あらゆる衆生が、たった一つの真理に向かってたゆまず進み続けるという宗教的なヴィジョンと、ぴたりと一致するのである。ゆえに、日本的な進歩史観の起源は法華経にあると言える。

そして、このような進歩に対する観念が、日本人の行動を支え、近代という時代を作り出していったのだとすれば、近代的な思惟というもの、それ自体、法華経によって特徴づけられていると言えるのである。つまり近代とは、法華経の時代であった。

したがって、もしも、近代の勝利によって歴史が終わったのだとすれば、それは法華経の勝利を意味している。日本文明は法華文明であり、それこそが真実の文明である。

南無妙法蓮華経。

軍隊の強さ

1

近代国家の擁する国民軍が強力なのは、兵隊が死を厭わないからである。たとえば、傭兵は金のために戦う。ゆえに、自分の命をかけてまで戦おうとは思わない。だから、国民軍と傭兵部隊が戦えば、必ず国民軍が勝つ。ナポレオン率いるフランス軍が強かったのは、彼らが国民軍であるのに対して、敵は傭兵部隊だったからである。

近代的な軍人は、祖国のために、あるいは家族や同胞のために戦う。それが自分の命よりも大切だと思うから、命がけて戦う。そういう兵隊は強い。逆に言えば、死ぬのを怖がっているような兵隊は弱い。そのような兵隊で構成された軍隊は、国民軍にはかなわない。

それは武器の問題ではない。どれほど強力な兵器を持っていようと、兵隊が怯えていたら役に立たない。その恐怖が相手に伝われば、その軍は心理的に劣勢に立たされる。戦争は、敵になめられたら終わりである。だから、兵隊が死を恐れているということを、相手に教えるてはならない。たとえそれが虚勢であったとしても、我々は死を恐れない、というアピールをしなければならない。

ゆえに、無人攻撃機は最悪の兵器である。米軍はなぜ無人攻撃機を使うのか。それは、米兵が死を恐れているからである。つまり、現在のアメリカ軍は、本質的に傭兵部隊と変わらない。おそらく、どんな

小国と戦っても、今の米軍は負けるだろう。

戦争の勝ち負けを決めるのは、兵器の殺傷能力ではない。どれだけ敵を殺しても、相手の意志を挫くことができれば、勝つことはできない。そのためには、こちらの弱気を相手に悟られてはならない。戦争の本質は騙し合いである。しかし、アメリカはそれを理解していない。戦争のやり方に関して、彼らが少しも進歩しないのは、日本が偽りの勝利を与えたからであろう。いちど失敗を成功だと思い込んでしまうと、その後も学習に失敗し続けることになる。日本人はずいぶん罪深いことをした。

2

ルーズベルトは、戦術家としては一流だった。彼の計略は、嘘をつくことだった。巧みに情報を操作することで、この戦いに負ければ祖国が滅びる、と兵隊に思い込ませた。そのため、太平洋戦争においては、米兵は死ぬ気で戦った。兵を死地に追いやることで全力を発揮させるという、いわゆる背水の陣を敷いたのである。イデオロギーの戦争利用に関しては、彼は非常に巧妙だった。

しかし、その後のことを彼は考えていなかった。先の見通しを持たずに戦争を始めるから、いつ止めればいいのか分からない。そもそも、日本が侵略国家だというのは嘘だったから、日本が降伏することはない。兵隊の士気を奮い立たせるために、そういう嘘をついたのである。その嘘を国民に悟らせずに戦争を終結させるために、彼の後任者が苦勞することになる。

ルーズベルトには、政治家としての資質はなかった。ヒトラーと同じく、彼は道化でしかなかった。

3

日本軍の兵たちは死を厭わなかった。その日本人の性質を完成させたのは、徳川家康だったと思う。遠離穢土・欣求浄土というその旗印は、この世に浄土を打ち立てよう、という彼の決意を示すものだった。

そこにあるのは、一種の宗教的な熱意である。しかしそれは、来世を願うものではない。そうではなく、この現世において極樂を現出しよう、という新社会建設にかける情熱である。日本人にとって、来世とは、この世とは別のところにあるわけではない。この世界こそが、来世なのである。将来の理想のために命をかけるということが、宗教的な意味を帯びているのである。

家康公は浄土を作った。彼の業績は、いくら称賛しても称賛しすぎることはない。太平の江戸の世こそは、我々が見習うべき手本だと思う。

第II部

科学・哲学論集

マルクスについて

1

マルクスの思想について、私の考えを述べておきたい。

まず、基本的なことから。私はすでに、アリストテレスとプラトンの哲学を批判している。[†]そのため、マルクスの思想に關しても、根本的にはすでに批判が終わっていると考えることができる。なぜなら、マルクスの思想も、アリストテレス哲学の範囲内に収まるからである。

具体的に言えば、アリストテレスの用いた可能態と現実態という概念に対応するものが、マルクスの思想の中にも見出せるはずである。たとえば、彼が商品进行分析するとき用いる、使用価値と交換価値という概念は、それぞれ可能態、現実態と同じ働きをしているはずである。

したがって、私がそれらの概念を批判するとき用いたのと同じ手法で、マルクスの理論を批判することができるはずである。私はマルクスにはあまり詳しくないので、はっきりとしたことは言えないが、純粹に理論的にはそのような批判が考えられる。

ここからは想像も混じるが、おそらく問題は、貨幣の存在という点にあると思う。マルクス主義は、貨幣の実在論である。この点に關し

[†]「空の論証」

て、マルクス主義と資本主義は全く同一である。

マルクス主義は、貨幣の実在を認めた上で、それを否定し、資本の蓄積を惡とみなす。一方で資本主義は、貨幣の実在を認めた上で、それを肯定し、資本の蓄積を善とみなす。この二つの思想は全く対照的に見えるが、本質は同じである。

そして、貨幣の実在ということは、詳しく考えれば、その貨幣を構成している要素である、使用価値と交換価値の実在と同じであることが分かる。そこで、使用価値と交換価値が空であることが示せば、晴れて貨幣の実在を否定でき、マルクス主義を完全に否定することができる。

2

2・1

では、貨幣が実在しないとはどういうことか。それを示す方法は様々あるが、たとえば、お金で買えないものについて考えてみよう。お金で買えないものはあるだろうか。時々耳にする質問だが、はっきりした答えを持っている人は少ないかもしれない。愛はお金で買えないと言う人もいるだろう。しかし、そもそも愛というものの自体が、存在するのかわるかあやふやなものだから、これでは答えになっていない。

2・2

たとえば、スピカという星がある。おとめ座の一番星で、青白い光を放つ、冷たい感じのする星である。あれをお金で買えるだろうか。

誰でもわかる通り、星はさすがに、お金では買えない。では、どうしてスピカはお金で買えないのだろうか。

それが遠くにあるものだから、買えないのだろうか。しかし現代では、日本にいなながら、アメリカの商店から物を買うこともできる。ゆえに、距離が離れているからといって、お金で買えないことにはならない。では、どうしてスピカはお金で買えないのか。

答えは、誰の所有物でもないからである。

売買ということは、売り手と買い手の二人の人間がいることで成り立つ。したがって、あるものを売ってくれる人がいない場合、それをお金で買うことはできない。スピカは誰の所有物でもないから、それを売ってくれる人がいない。だから、お金では買えないのである。

さて、これが一つ目の答えである。

そして、答えはもう一つある。

2・3

今までのところで分かったのは、誰の所有物でもないものは、お金では買えない、ということである。では、お金で買えるものとは、どのようなものだろうか。

誰の所有物でもないものは、お金では買えない、ということは、お金で買えるものは、誰かの所有物でなければならぬ、ということである。我々は今、世界全体を二つに分けて考えている。全ての人間の所有物全体の集合と、誰の所有物でもないものの全体の集合である。このうち、お金で買えるものは、全ての人間の所有物の集合に属しているわけである。

しかし実は、この集合の中に、一種類だけ、本当はお金では買えないものが混じっているのである。

それはなんだろうか。

それは一体、誰の所有物だろうか。

答えは、自分の所有物である。

先ほどと同じで、二人の人間がいないと、売買は成り立たない。つまり、自分の持ち物を、自分のお金で買うことはできないのである。あたりまえである。

まとめると、お金で買えないものは二つある。一つは、誰の所有物でもないもの。もう一つは、自分の所有物である。これが答えであった。

2・4

さて、話はまだ終わりではない。結論が出るまで、もう少しお付き合い願いたい。

次の問題は、あなたにとって価値のあるものは、あなたが自由に使えるものか、それとも自由に使えないものか、どちらであるか、ということである。

たとえば、あなたが砂漠で遭難して、三日間何も食べていなかったとしよう。その時あなたの目の前に、自由に食べられるリングと、絶対に食べてはいけない黒毛和牛のステーキがあったとしよう。あなたにとって価値があるのはどちらだろうか。

考えるまでもなく、あなたにとって価値があるのは、あなたが自由に使えるものである。潜在的な価値がどれほどあっても、自分でそれを使えないのであれば、何の意味もない。

では、あなたが自由に使えるものは、次のうちどちらだろうか。それは、あなたの所有物だろうか、それとも他人の所有物だろうか。

もちろん、あなたの所有物である。

さて、以上の議論をまとめてみよう。あなたにとって価値があるものは、あなたが自由に使えるものである。そして、あなたが自由に使えるものは、あなたの所有物である。さらに、あなたの所有物は、あなたのお金では買えない、ということが、先ほどの議論で明らかにされていたのだった。そうすると結局、あなたにとって価値があるものはすべて、お金では買えないものである、ということになる。それならば、お金というものには、一体何の価値があるのか。

お金には、何の価値もないのである。つまり、お金というものが実在し、そこに何らかの価値が存在している、という考えが、そもそも間違っていたのである。お金というものは、ただの取り決めにすぎない。社会生活を円滑に進めるためのルールである。それ以上の意味はない。

さて、以上の議論で、貨幣の非実在ということがどういうことなのか、多少は分かってもらえたのではないかと思う。

3

本当はこれ以上続けなくてもよいのかもしれないが、もう少し言うておきたいことがある。

それは、資本主義の起源についてである。資本主義はルネサンスのイタリアで生じたという話もあるし、イギリスにおける「囲い込み」の過程で発達したという意見もある。

しかし、おそらく、資本主義と市場経済の起源は中国にあって、と

くにモンゴル帝国が不換紙幣を発行した時に、それは完成されたのだと思う。それが地中海世界に影響を与え、西洋的な資本主義が発達したのだろう。

つまり、市場経済は様々な形でありうる、ということである。たとえば、私有財産制度がなければ市場経済は成り立たない、と考える者もいると思うが、それは誤りである。なぜなら、そんなものは中国には存在しなかったからである。それでも市場経済が機能していたということは、現在の経済学の市場に対する考え方が、根本的に間違っているということの意味している。

ヨーロッパの学者たちは、市場経済に対して、不必要な条件を付けて過ぎているのではないだろうか。我々は、市場経済のより一般的な条件を探し出さねばならない。その上で、新しい資本主義の在り方を考えてゆくべきであろう。

とくに現代の資本主義は、土地の囲い込みを前提にしているところがあるので、遊牧民など、農耕以外の文化を持つ人々には向いていないと思われる。もっと融通の利く資本主義が必要である。

3・1

また、以上の議論が正しいならば、中国人がマルクスを信じる必要は全くない。マルクスよりも孔子の方が偉いし、レーニンよりも孟子の方が偉い。当然のことである。

捕鯨について

1

国際捕鯨委員会（IWC）では、多数決をとっているそうである。反対が多数の場合、すべての加盟国の捕鯨活動は禁止され、賛成が多数の場合、捕鯨は許可される。しかし、そもそも多数決をとる必要などない。捕鯨をしたい国はすればよいし、したくない国はしなければよい。そして、捕鯨をする場合、どのような基準に則って、どのくらいの範囲であれば許可されるのか、という議論をしたほうが、よほど建設的である。

IWCの運営には、明らかに文化的な偏りがあり、捕鯨の禁止を強制する方向に議論を進めようとしている。これは、国際機関の在り方として妥当ではない。ゆえに、日本がIWCを脱退したのは正しい判断だったと思う。むしろ、遅すぎたくらいである。

2

2・1

ヨーロッパ人は鯨を殺さないそうである。それはヨーロッパ独特の文化であって、普遍的なルールではない。

たとえばヒンドゥー教徒は、牛を殺さないというルールを守っている。だが、それを他の人々に押し付けようとはしない。イスラム教徒は豚を食べないが、他人が豚を食べるのを禁止しようとはしない。しかし、ヨーロッパ人は違う。彼らは、自分たちの文化を、世界中に押し付けようとしている。ヨーロッパだけ、文明が未発達なのである。

2・2

鯨は賢い動物だから食べてはいけない、と言う人がいる。では、頭の悪い鯨同士を掛け合わせて、頭の悪い鯨の血統を作れば、それは食べてもよいのか。

そのような理屈があるわけがない。結局、ヨーロッパ人が鯨を殺さないのは、タブーの一種であって、賢いから、というのは後付けの理由にすぎない。

鯨を殺してはいけないという文化は、確かに素晴らしいものである。だからといって、それを他人に押し付ける必要はない。

鯨は人間ではない。ただの動物なので、取って食べてもよい。あたりまえのことである。生き物は毎年新しく生まれてくるので、その分だけ食べるようにすれば、生き物の数は変わらない。その程度であれば、食べてもよいはずである。

蟹は一度に一万個の卵を産むが、その中で大人になるのは二匹くらいである。残りの九千九百九十八匹は、他の生き物に食べられるなどして、すべて消費されてしまう。自然界は太古の昔から、大量生産大量消費である。

2・3

人間の文化は常に人間の外、自然の中にある。人間の中をいくら探しても、人間独自の精神など、何一つ見つからないだろう。我々の文化はすべて、自然から与えられたものである。人間が作り出したものではない。

鯨を食べることで、鯨を知ることができる。そうすると、その分だけ人間の文化は豊かになる。食は文化である。それは、自然を知るということでもある。

私が知る限り、最古の生物学の研究書は、アリストテレスの『動物誌』である。その中で彼は、様々な生物の味を記録している。このエビは秋になると身が詰まってうまいとか、この魚は冬になると脂がのつてうまいとか、そういった記述に溢れている。

科学にとって重要なのは、人間の感覚である。自然を知るためには、五感を活用しなければならない。

3

仏教にタブーはない。タブーという感情を克服することが、仏教の価値である。仏教における不殺生とは、慈悲の心から起こるもので、理性に基づいた判断である。自分の判断によって、生き物を殺さない、と決めることである。

一方で、タブーは、理性的なものではない。それを食べてはいけないう、ということになっているから、食べないだけである。それは個人の判断とは関係のないところで決められている。タブーとは、自分の判断によらず、他人の言葉に盲目的に従うということである。この意味で、キリスト教はタブーの宗教である。

仏教徒は、他人の言葉によらず、自分の判断に基づいて行動する。何がよいことであり、何が悪いことであるかは、自分で判断しなければならない。

3・1

キリスト教においては、神の存在を疑うことはタブーである。しかし、どうして神が存在すると言えるのだろうか。それは、イエスがそう言っているからである。モーセがそう言っているからである。彼ら預言者の言葉を疑ってはならず、我々はそれを無条件に信じなければならない。それがタブーである。

実際には、私は神を見たことがない。だから、それを信じる理由はない。神が存在するという確実な根拠も知らない。おそらく、私以外の多くの人もそうだと思う。つまり、神が存在するという判断を、自分の経験に基づいて下せる人はいない。自分の判断を他人に預けることなしに、神を信じることはできない。

キリスト教の信仰には、理性的な要素は全くない。それはただの迷信である。

3・2

ついでに言わせてもらえば、マルクスの経済学や、フロイトの精神医学、ダーウィンの進化論、ユダヤ教などは、キリスト教と同じく、すべて迷信である。

特に、精神医学については注意を促しておきたい。精神医学が日本社会に及ぼした悪影響は、非常に大きなものである。おそらくその影響力は、マルクス主義以上だと思う。現代社会においては、宗教の持

つ影響力はそれほど大きくない。それよりも、ここで挙げたような疑似科学の方が、無視できない影響力を持っている。

だいたい精神科医の言うことは、呪術師と変わりがない。母親だとか父親だとかの訳の分からないストーリーをくどくど述べ立てるだけで、それが科学だと思い込んでいる。彼らが実践しているのは、科学ではなく、シャーマニズムである。このような荒唐無稽なおとぎ話を大の大人が信じるようになったのだから、日本人が劣化したと言われるのも故のないことではない。いわゆる精神医療はただの詐欺である。

また、ダーウィニズムは、もともと科学理論と言うほどのものでもない。だが、優性思想と結びついたとたんに、有害さを増す。ダーウィニズムがもたらすものは、遺伝子とその表現型という二元論である。これは、能力とその働きという二元論と類比的であり、さらに言えば、可能態と現実態という二元論と同型である。これは、アリストテレス以来、すべての西洋思想が抱える宿痼とでも言うべきものであり、注意を要する。

3・3

重要な問題なので、ダーウィニズムの二元論について、もう少し説明してみたい。以下、この章の終わりまで哲学的な議論になるので、苦手な人は飛ばしたほうがいい。

アリストテレスの術語を用いれば、遺伝子は可能態であり、表現型は現実態である。全ての能力は、その発現とは別に、それ自体として存在する、という考え方が、この種の二元論の基本である。

たとえば、難しい漢字をすら書ける人がいたとしよう。漢字を書くということは、その人の行為である。そして、その人にそのよう

な行為をなさしめているもの、その人にそれを行うことを可能にしているものが、その人に内在している。それが能力である。この場合、漢字を書くことができるという能力が、その人の中に存在していると考えられている。その能力が発現した時に、能力が働きへと移り変わり、漢字を書くという行為が実現される。これが、能力とその働きという二元論である。ダーウィニズムにおいては、遺伝子と表現型という概念が、全く同じ役割を担っている。

この種の考え方には一種の矛盾が含まれている。まず、能力とその働きは区別されるものなのか、という問題がある。もしも能力というものが、それ自体として存在するものであるならば、そして、その働きというものも、能力とは別個に存在するのだとすれば、いったい能力とその働きとの間には、どんな関係があるのだろうか。

能力が原因となって働きが生じるのだろうか。その場合、働きが生じた瞬間に、能力は消えてしまうのだろうか。それとも、その働きが続いている間ずっと、能力も存在し続けているのだろうか。

能力が歯車のようなもので、それが、働きというもう一つの歯車を回しているのだとすれば、その歯車が回っていない間は、それを能力と呼べるのだろうか。つまり、能力そのものが、その能力の発現に際して変化しうるのだとすれば、そもそもどうして能力の存在を仮定する必要があるのか。

能力というものの存在が必要とされたのは、ある行為をなしうる人と、なしえない人の違いを説明するためであろう。ある人にはこれができるが、別の人にはできない。そのときに、前者には能力があり、後者には能力がない、と言われる。それが実在するものであると仮定し、前者の中に能力というものが存在する、と考えることから二元論的な思索が生じる。

3・4

しかし、その能力というものは、行為を説明するために必要とされたものである。したがって、能力と行為とを結びつける必要がある。つまり、能力が発現されたときに、行為が現われる、ということである。だが、ここに問題がある。

いったい、能力が発現するとはどういうことか。能力というものが既に存在するのであれば、それがさらに存在しなおすことはできない。しかし、能力が存在しないものであるならば、それによって行為を説明することなどできるはずがない。そして、能力そのものが、発現しない状態から発現する状態へと変化するのだとすれば、そもそも能力の存在を仮定する必要はない。なぜなら、その行為をなしている人自身が、行為を行わない状態から、行為を行う状態へと変化した、と考えれば済むからである。この説明には、能力という概念は現れない。

突き詰めて考えれば、能力とその働きという二元論による説明には、つねに矛盾が付きまといることが分かる。それゆえに、私はそれを迷信と呼ぶ。そして、その矛盾の根底にあるのは、存在に対する信仰である。それが能力であれ何であれ、およそ、何らかのものが存在する、という考えはすべて、それ自体矛盾を含んでいるというのである。これを仏教では空観と呼ぶのであるが、詳しくは別の論考に譲る。

では、仏教ではこれをどう説明するのかと言えば、それは縁起であり因果律である。原因があるから結果があるのであり、そこに何らの存在をも仮定する必要はない。この考えをどのように生物学に応用するかは、ここでは述べない。

また私は、個人的には、ダーウィンの進化論よりも、今西進化論に共感を覚える。

精神医学の問題点は、意識の存在を仮定していることである。ある気分と、それを感じる主体とを区別して考えている。それが、精神医学における二元論である。たとえば、落ち込んだ気分とは別に、それを感じる主体の存在が暗に仮定されている。では、そのような主体が存在する、という主張には、どのような根拠があるのだろうか。

もしも、ある気分とは別に主体が存在するのだとすれば、いかなる気分も持たない主体というものも存在しうることになるだろう。それは一体どういうものなのか。また、その主体が常に何らかの気分とともにあるのだとすれば、なぜ、そのような主体の存在を仮定することができるのか。我々が感じるのは気分だけであって、その気分を感じる主体というものを認識することはできない。それなのに、なぜ、そのようなものが存在すると言いうるのか。

あるいは、あなたは次のように反問するかもしれない。このような問いを発する私自身が、主体として存在しなければならないのではないのか、と。しかし、その必要はない。なぜなら、私がこのような言葉を発するのは、いま私が抱いている考えと過去の経験とを原因としており、主体の存在を仮定しなくても、これらの現象を説明することは可能であるから。また、「私」という言葉は、言語習慣に従って便宜上用いているだけであって、「私」という単語に相当する実体を仮定する必要はない。

また、何かを認識するためには、それを認識する主体が必要だと考える人がいるかもしれない。その場合、認識する主体は、認識作用が始まる以前から存在していることになる。それならば、何の認識作用もないのに、どうしてその存在を認識することができるのか。このように考えても、主体が存在するという仮定には根拠がないことが分

かる。

ゆえに、いわゆる意識や主体の存在を仮定する必然性を証明することはできない。しかし、そのような主体の存在を仮定しなければ、精神医学というものは成り立ちえない。したがって、精神医学には普遍的な妥当性が欠けている、と言わざるをえない。

フロイトは無意識の存在を証明したが、意識の存在は証明しなかった。意識の存在は、ただの迷信である。さらに詳しく知りたい人は、龍樹の『中論』を研究してみてほしい。

3・5

人間は、ただのタンパク質の塊である。そこに意志や感情が宿っていると考えるのは、一種の擬人化である。我々は、人間ですら擬人化して語っているのだから、犬や猫を擬人化してはいけないという法もなからう。

西洋の生物学には、どことなく禁欲的なところがあって、人間の魂の持つ神聖さを犯さないように、細心の注意を払っているように見える。それで、動物の擬人化は正しくない表現だと見なされることがある。そうした考え方は一種の偏見であって、明らかにキリスト教に由来しているのだが、西洋の学者たちは、そのことに全く気付いていないらしい。しかし、人間の精神と動物の精神の間に明確な区別がある、と考えるべき根拠が、一体どこにあるだろうか。

政治と学問

1

民主主義であろうが何主義であろうが、実際に政治を行うのは一人の人間である。ゆえに、政治の場で問題となるのは、その人間の資質である。多くの人々を選ばれたからといって、その瞬間に、その人が優秀な人間に変わるわけではない。ゆえに、問題は、いかにして良い資質を持った人間を育てるか、ということであって、どんな人間を選べばよいか、ということではない。

たとえば、縄文人が石包丁を作ろうとしているとしよう。地面に落ちていた石の中で、最もよい形をした石を拾ってきたとしても、それは、天然の石を加工して作った石器にはかなわない。ちょうどそれと同じように、よい人間を選ぶ努力をするよりも、よい人間を作る努力をするほうが、合理的である。

人間の資質は、教育によって作られる。よい人間は学問によって作られる。そして学問とは、古典を学ぶことである。孟子を学ぶことである。ルソーやロックをいくら学んでも、何の足しにもならない。西洋の学問を学ぶよりも前に、人間はどうあるべきか、という根本のところを学ばねばならない。主義や主張はどうでもよい。そんなものは、実際の政治とは何の関係もない。それよりも、自分の精神を磨くことが肝要である。

2

政治とは教育である。教育が政治を作り、人を作り、国を作る。あらゆるものの根底には学問がある。学問によって、人は人と成るのである。

社会に降りかかるあらゆる困難は、学問の不足を原因としている。社会とは、人間の集まりである。したがって、社会を構成する一人ひとりの人間の質が低下すれば、社会全体の質が低下することになる。これは、学問を疎かにすることから生じる害である。

無責任な人間が集まれば、無責任な社会ができる。そのような社会には、いかなる秩序もありえない。責任感のある人間が集まれば、責任感のある社会ができる。それは、秩序のあるよい社会である。一人ひとりの人間の精神が、社会の精神を作る。政治家が社会を作るのではない。ゆえに、この社会に問題があると感じたならば、政治家の文句を言う前に、自分自身の精神を省みるべきである。

3

民主主義を実現するために、選挙は別に必要ない。政治家が国民の意見を聞けば、それが民主主義なのであって、それは、あらゆる政治の基本である。政治家を多数決で選ばなければ、彼らが国民の意見を尊重しない、と決まっているわけではない。選挙をせずとも、政治家が国民のことを慮るならば、それでよいのである。

ルソーはそれを一般意思と呼んだようだが、中国や日本では、それを天命と呼ぶ。そして、天命を得ない為政者は廃してもよいのだ、と

孟子は言った。これが民主主義でなくてなんであろうか。

天命は民衆の中にあるのではない。民衆の声を聴こうとする為政者の意思こそが、天命である。この点で、民主主義とは考え方が逆である。民主主義の根底にあるのは、自分の意思を他人に強制しよう、という考え方である。一方で、儒教は自発性に基づいている。他人に強制しようというのではなく、その良い部分を伸ばそう、という発想である。浩然の気を養え、ということは、天命に従う意思を養え、ということである。一般意思は、そこにあるものではなくて、育てるべきものである。

英語の特徴

1

英語が論理的な言語であるというのは、不正確な表現である。実際には、英語は、論理的な表現しかできない言語である。つまり、英語では、自分がすでに分かっていることしか、表現できないということである。しかし、自分でも十分に理解できていない考えというものも、あるはずである。ところが、そういうものを英語で表現することはできない。だから、自分でも理解できていないものを、手探りで考えてゆくということが、英語を使うとできなくなる。それは英語の欠陥である。

そういうものを英語で表現しようとする、分かったふりをするしなくなる。本当はよく分かっているものを、英語の論理に当てはめて、分かったようなつもりになって書くのである。そうしないと、ちゃんとした文章ができない。つまり、英語は知ったかぶりの言語である。

ある考えが論理的であるからといって、それが常に正しいとは限らない。また、ある考えが論理的でないからといって、それが常に間違いだとは限らない。

英語の表現は、正しい可能性のある考えも、それが論理的でないという理由だけで、削ぎ落としてしまっている。そのため、英語の話者

には、論理的な考えしか理解できないのである。論理的でない考えは、彼らにとっては存在しないのと同じである。

だから彼らは、自分の間違いに気づくこともできず、新しいことを学ぶこともできない。なぜなら、自分が間違っているということを、論理的に表現することはできないからである。それは、論理が通らない、という形でしか認識できない。しかし、そういうものを、英語で表現することはできないのである。

英語で表現できる物事の範囲は、非常に限られている。そして、そういう言語を使っている人は、自分の認識の狭さに気づくこともできない。それを理解する手段がないのである。

2

一方で、日本語の表現はもっと柔軟である。それはおそらく、日本語が漢文をベースにしているからだと思われる。漢字の表現力は凄まじいが、扱いにくいという難点がある。日本語はそれをよく克服していると言える。

使い方によっては、日本語はいくらでも論理的になる。一方で、論理的でない文章も表現することができる。それは、表現力が高いということであり、日本語の長所の一つである。

英語は経験の浅い言語である。自分とは異なる思想を受け入れるという手続きを、まだ経験したことがない。しかし、英語の欠点は、これから英語を改良してゆくことで、解決できると思う。もちろんそれは、我々の仕事ではないのだが。

3

また、パスによれば、自己の認識は、誤りの認識から生じる。人間は、自分の判断が間違っていることを理解することで、そのような間違いを犯す主体として、自己の存在を発見することになる。したがって、自分の間違いに気付くことができない人間には、自我は存在しない。ゆえに、英語の話者には、自己意識が欠けていると言える。

このような議論こそ、パスが天才と呼ばれる所以である。カントにかぶれているために、彼の議論には分かりにくいところも多い。だが、そこを差し引いて読めば、彼の思想の神髄が無我であることが分かる。西洋的な哲学の伝統にまみれながら、これほどの思想的な完成を見せた人物は、彼その他にはいないと思う。パスにはどこか、仏教と相通じるところがある。

言葉について

言葉というものは、どれだけ厳密に定義したつもりでも、すぐにその定義から滑り落ちてしまうものである。だから、一つの言葉を、ある決まった意味でだけ使おうとしても、上手く行くはずがない。

言葉を定義することはできない。だから、言葉を使うときには、その意味にこだわってはならない。言葉の意味は、それを使うたびに新しく生み出されるものである。全ての言葉には定義がない。

ある時にある言葉を厳密に定義して、あとでその言葉を使えば、いつでもその時の考えを再現することができると考える者は、ただの馬鹿である。言葉はその都度、新しく語りなおされねばならない。ある言葉で表された概念が、あるときには正しいように思われたからといって、次もそうであるという保証はない。また、それが以前の概念と同じであるという保証もない。そもそも、ある言葉が、ある特定の概念と、一時的にであれ結び付いているという考え自体が間違いである。言葉と離れて概念は存在しない。しかし、言葉と概念は同一のものではない。言葉と概念は不一不異である。それは空であり縁起である。

言葉を厳密に定義できるという思い込みから、あらゆる間違った学問、つまり学問もどきが生まれてくる。西洋人が学問と呼んでいるのは、全てこのようなものである。民主主義だの自由主義だの社会主義

だの、全ての言葉を知ったかぶりして使っているから、議論がどんどん混乱する。混乱すれば混乱するだけ、自分たちは真理に近づいているという思い込みが強くなるのだから始末に負えない。名前を付ければ分かったつもりになる。分かったつもりで議論を積み重ねて、それが学問になる。そうした学問のことを、学問もどきと言うのである。そもそも、言葉は定義できないという単純な事実に気づいていない。群盲象をなでるといふ諺そのままである。

イエスと奇跡

1

イエスは死人を生き返らせたそうだが、そんなことは、インドでは日常茶飯事である。また、彼は神の子供だというが、神の親類縁者ならば、インドにはごまんという。聖書に記されている奇跡は、マハーバーラタと比べると、あまりにも貧相である。インドに行けば、イエスはどこにでもいる仙人の一人に過ぎない。それなのに、どうして西洋人は、あそこまで聖書をもてはやすのだろうか。

公平な立場に立つならば、聖書の記述と同じように、マハーバーラタの記述も信用しなければならない。聖書に書いてあることだけが正しく、ほかの言い伝えは全て間違いだというのは、ただの偏見である。また、イエスの実在を立証する証拠がいくらか見つかったところで、それは、彼が復活したことの証拠にはならない。しかし、もしもイエスが復活しなかったのだとしたら、彼に何の価値があるだろうか。

聖書とマハーバーラタがどちらも真実だとするならば、マハーバーラタの方が遥かに重要である。

2

イエスの言葉は、クリシュナの言葉よりも、本当に立派だっただろうか。

イエスの女々しさは、クリシュナの雄々しさにはかなわない。イエスの弟子たちの臆病さは、アルジュナの勇敢さにはかなわない。そんなことは子供でも知っているはずだ。

バラタの雄牛はもう絶滅してしまったのか。自分がいかさまに遭っていることに、まだ気付かないのか。

第III部

中国論集

米中戦争

1

資本主義を成り立たせるために、私有財産権や知的財産権を保障する必要はない。それらの権利は、経済とは無関係の政治的要求である。したがって、アメリカの中国への要求は、純粋な内政干渉であると言える。

いまアメリカが中国に突き付けている要求は、実現不可能なものである。中国は、社会主義を信奉しているから、あのような体制になったわけではない。あれが中国の本来の姿なのだ。無理に体制の転換を強いるならば、中国は崩壊するしかなくなるだろう。それがアメリカに与える影響は、それほど大きくはないかもしれない。しかし、日本に与える影響は甚大である。アメリカがやっていることは、アメリカの利益にはなるかもしれないが、日本の利益には決してならない。

また、米中の貿易戦争によって利益を得るのが誰なのか、ということにも注意してもらいたい。中国製品に關税をかけることで、損をするのはアメリカの消費者である。關税収入の増加によって、得をするのはアメリカ政府である。アメリカ政府がやっていることは、アメリカ国民の利益を減らし、アメリカ政府の利益を増やす、ということである。

どうしてアメリカ国民は、政府のこのような方針に黙って従っている

のだろうか。それは、アメリカ国民が、大統領の奴隷だからである。彼らは、主人の言うことならば何でも従う。

アメリカという国家には、全く自由がない。むしろ、中国人の方が自由である。なぜならば、中国人は、中国が独裁国家であることを知っている。それに対抗する術も知っている。他方でアメリカ人は、アメリカが独裁国家だということを知らないし、それに対抗する術も知らない。

しかし、だから中国が勝つ、とは言えない。アメリカは全体主義国家なので、アメリカ国民とアメリカ政府は一心同体である。アメリカ国民は、自分たちの利害が、アメリカ政府と一致すると思込んでいる。だが、中国人はもっと冷静である。個々の中国人は、中国政府からは独立している。彼らに愛国心はない。彼らは常に、自分一人の利益を計算して動いている。つまり、アメリカが対決しているのは、中国という国家ではなく、習近平という個人である。その点を、アメリカ人はどれだけ理解できているだろうか。

日本はかつて、その点を見誤り、失敗した。アメリカが同じ轍を踏まないことを願う。

1・1

中国人は一見愛国的に見えるが、それは、そう見えるように振舞っているだけである。中国人が本当に愛国的ならば、政府が検閲を行う必要はない。現に、アメリカ政府は全く言論統制を行っていないが、アメリカ国民は非常に愛国的である。

中国人が愛国的なのは、そうしないと政府に目をつけられ、自分が損をするからである。愛国的な中国人というのは、矛盾した表現である。

1・2

アメリカ政府は、中国政府が自国のハイテク企業に補助金を出し、技術開発に努めていることに不満を抱いているらしい。

しかしアメリカも、昔から同じことをしてきたのではないか。アメリカ発のイノベーションの一部は、DARPAが開発したものである。DARPAの研究成果は公開されているが、公的資金によって自国の産業を育成するという点では、中国のやり方と変わらない。

アメリカの中国批判は、揚げ足取りにすぎない。というより、同族嫌悪であろう。

2

昔から中国の皇帝は、自分で工房を経営するなどして、営利活動に勤しんできた。つまり、皇帝自身が一人の商人だったのである。中国王朝の本質は営利企業であり、利潤の追求を唯一の目的としている。中国における国家とは、商人の連合体のようなものである。だから、中国人には公私の区別がない。中国における公とは、皇帝の私有物を意味している。しかしそれは、国の全てが皇帝のものだという意味ではない。

現代的な意味での公的な権力は、かつて中国には存在したことがないし、今も存在しないし、これからも存在しないだろう。むしろ、自分の利益を追求するためには、お互いに協力したほうが効率がよい、という打算の上に秩序が成り立っている。利潤の追求という共通の目的のために、人民全体が協力態勢にある、ということが、中国における国家である。

3

中国人は国家に対して、いかなる幻想も抱いていない。だから、国のために命を捨てるということはありえない。

中国の軍隊は、基本的に内向きのものである。国内の治安を維持することが、軍の第一の目的である。したがって、日本が中国に侵略される心配はない。全くないというわけではないが、可能性は低い。

もしも人民解放軍が外国に打って出るならば、中国国内には力の空白ができる。そこで何が起きるかは未知数である。軍事力だけが、中国に秩序をもたらすことができる。たとえ中国共産党といえど、それは例外ではない。ゆえに、下手に外国と戦争をすれば、共産党の体制そのものが崩壊しかねない。共産党の支配は、解放軍によって支えられているのである。

民衆は、それが自分の利益になると判断する限りで、共産党を支持しているに過ぎない。共産党ですら、常に背後から狙われている。中国には絶対的なものは存在しない。政治的な安定は常に一時的なものである。

良くも悪くも、これが中国社会の実相である。今のところ、中国はよく治まっているのだから、むやみに刺激するべきではない。もしもアメリカが、中国社会は崩壊しても構わない、と考えているのなら、我々がアメリカを抑えねばならない。中国と日本は運命共同体である。中国の平和がなければ、日本の平和はありえない。

4

誰も中国に勝つことはできない。なぜならば、そもそも中国という国家は存在しないからである。それは、自分は中国の外側にいると考

える者が見る、幻に過ぎない。

我々はいつでも、中国人と同じ土俵に立たされている。中国に戦争を仕掛けるということは、自分も中国のルールに従い、中国人になるということである。中国に勝つということは、自分が中国の皇帝になるということである。一人の中国人に敗北を認めさせるということは、それ以外のすべての中国人に喧嘩を売ることである。自分も、中国社会の終わりのない闘争に巻き込まれるということである。

もしかすると、アメリカ人にはその資格があるのかもしれない。私は中国を恐ろしいと思うが、彼らはそうではないかもしれない。中国には、地獄から天国まで、全てのものがそろっている。限度というものがない。

私ならば、このパンドラの箱をあえて開けようとは思わない。今はおとなしくなっているのだから、そっとしておくべきだろう。アメリカ人がそれを開けようとするならば、日本人は全力で阻止するべきだと思う。

南京虐殺と便衣兵

1

南京虐殺には、便衣兵の問題が絡んでいたと言われている。

便衣兵とはゲリラのことで、軍服を着ていない人間が、軍隊に攻撃を仕掛けることである。彼らは一般人と同じ格好をしているので、誰が兵隊であるのか、区別ができない。日本軍が南京に入城した際、南京に逃げ込んだ中国兵たちは便衣兵になり、日本軍に攻撃を仕掛けてきた、という意見がある。

しかし、実際はそうではなく、おそらく、負けた中国兵たちが軍服を脱ぎ、逃げ出そうとしていたのだと思う。それか、軍服を脱いだ中国兵が市内に隠れて、日本軍に見逃してもらおうとしていたのだろう。

だが、日本兵の方からすれば、今までさんざん味方を殺してきた敵兵たちが、自分たちが負けたとたんに軍服を脱ぎ捨て、何の責任も取らずに逃げ出そうとしているのだから、許せるはずがない。さらに、街の外に逃げるのであればまだしも、街中に居残っているようでは、どうにもならない。

都市の攻略は、残敵の掃討をもって完了する。というのは、敵が周辺に残っている場合、いつ敵の攻撃を受けるかわからないので、進駐軍は休息をとることもできないからである。周辺一帯から敵を排除し

て、ようやく一息つけるようになる。つまり、敵を排除するということは、兵士の命を守るために必要なことである。

しかし、中国兵が軍服を着ていないとなると、どれが兵隊なのか見分けがつかない。さらに言えば、何百人からの兵隊が軍服を脱ぎ、街に紛れたのだとすれば、市民がそれに気づかないはずがない。つまり、市民が彼らをかくまっていたと考えざるをえないし、そう思われても仕方がない。

本当ならば、そんな兵隊がいたら、市民がそれを捕まえて拘束し、進駐軍に突き出さなければならぬ。あるいは少なくとも、町から追いつき出さねばならない。そうしないと、市内の秩序を保つことはできないだろう。しかし、南京市民にはそれができなかった。だからある意味では、彼らも同罪である。

もちろん、だからと言って、殺していいということにはならない。しかし、この件に関しては、日本側に落ち度があったとは言えない。落ち度があったのはむしろ中国人の方であり、事件は不可抗力に近い。先に日本兵の命を軽んじたのは中国人の方である。戦場で敵を殺しておいて、その責任もとらずに逃げ出そうとしたのだから、卑怯と言われても仕方がない。だからそのあとで、日本兵も、中国人の命を軽んじるようになった。それが虐殺の真相であろう。

日本兵のしたことは誉められたものではないが、しかし、非難されるべきものでもないと思う。また、中国人の罪は死によって報われているのだから、いまさらどうこう言うことでもない。だから、あの事件はすでに終わったことだと思う。これが私の結論である。

2

私は、日中戦争が侵略戦争だったとは思わない。抗日は共産党の作ったプロパガンダであって、彼らの本心は、自分たちが中国を支配することにあった。そのために共産党は、日本軍と蒋介石をぶつけたのであり、日本軍は中国人同士の権力争いに巻き込まれただけであつた。

つまり、日本が侵略者と呼ばれるのは、中国からさっさと引き揚げたからである。もしも日本軍が中国に居座っていたら、我々も中国人の一部だとみなされていただろう。日本人は知らず知らずのうちに、中国の覇権争いに参加してしまっていたのである。

中国人には国内・国外という区別がない。中国がすべてであつて、この世界は中国そのものである。だから、中国人から見たら、日本人も中国人である。日本人が自分たちのアイデンティティを保とうとしていることは、彼らには理解できないだろう。中国人にはそもそも、国家という観念が欠如している。

むしろ、日本人が中国から引き揚げたことで、よそ者である日本人に対して、中国人というアイデンティティがはじめて生まれたのかもしれない。つまり、あの時にはまだ、中国人というアイデンティティが確立していなかったのである。中国という国家が存在しないときに、それを侵略することなどできるはずがない。そうではなく、日本人が中国を作ったのだ。

結局、あの戦争を侵略戦争と呼ぶのは、共産党のプロパガンダに協力することになる。共産党政権を存続させるためには、それも良いのかもしれないが、それが事実だと考えるべきではない。実際のところはもっと複雑である。

むしろ我々は、あの戦争を侵略戦争と呼ぶことによって、中国人の

アイデンティティを支え、それが結局は、中国国内の少数民族の弾圧につながっているのかもしれない。中国人は、中国は漢民族の国家でなければならぬと考えている。だから、少数民族を漢民族に同化しようとしている。しかしこれは、我々がかつて韓国において実行した政策に酷似している。

中国は日本の鏡像である。中国人のアイデンティティのモデルは日本であり、日本のような単一民族国家になるために、いまだにむなしい努力が続けている。近代的な国民国家の抱える歪みが、様々な民族の悲劇につながっているのではないだろうか。

それはともかく、日中戦争においては、日本側に侵略の意図はなかった。日本人は新しい中国の覇者になりたかったわけではない。我々はその時すでに、中国人の背後にいるアメリカやイギリスを見据えていたのである。

しかし、中国人にそれが理解できるはずもなく、彼らは日本軍を次の覇権候補としか見ていなかった。我々の側からすれば、あの戦争は徹頭徹尾すれ違いだったのである。

3

石原莞爾が中国との和解策として提案していたのは、ハル・ノートとほぼ同じ内容だった。日本は、中国から軍を引き上げ、中国における権益をすべて手放す代わりに、中国政府に満洲国の独立を認めさせる。この条件で、日中戦争を停戦に導こうとしていた。日本がこの案を提示すれば、アメリカもイギリスも納得せざるを得なかっただろう。彼は、日本の中国侵略には大義がなく、それが、英米に付け入る隙を与えかねないことを理解していた。

正義を失えば、その人の立場は弱まってしまふ。相手に非難されても、何も言い返せなくなってしまうからである。逆に、その人の行動が正義になつていれば、誰にも非難される心配はない。国際政治の舞台において、これは非常に重要な原則である。日本の中国侵略は、そこに全く正当性が見出だせないという理由で、戦略的には誤りであつた。

石原は帝国主義者ではなかつた。共產主義とはまた違つた意味での、反帝国主義者であつた。

4

近代以前の時代には、中華文明の力は、西洋文明よりも遥かに大きかつた。それが十八、九世紀になると、西洋の力が中国を圧倒し、中国への侵略が始まることになる。どうしてこのように、東西の力関係が逆転してしまつたのだろうか。

私の考えでは、原因はアヘンである。イギリスの商人が持ち込んだアヘンによって、中華文明は完全に破壊されてしまつた。つまり、東西文明の格差は、人為的に作り出されたものである。

もちろん、これは一つの仮説であり、もしかすると検証は不可能かもしれない。しかし、麻薬には確かに、一つの国を滅ぼすだけの力がある。そういう考え方もできるということを、心に留めておきたい。

5

中国の経営は、日本人がやつたほうが上手く行くと思う。日本が中国を占領していれば、二十世紀の後半には、中国はアメリカを凌ぐ超

大国になつていただろう。しかしそれは、日本人には何の利益もたらさなかつただろう。

結局、中国のことは、中国人に任せようがよい。日本は中国の政治に深入りせず、中国において安定した政権が続くように、わずかに力添えをする程度でよいのではないか。多くの日本人にとっては、正しい歴史認識よりも、平和のほうが大事である。

仏教では、二種類の真理が存在すると説く。勝義の真理、つまり究極的な真理と、世俗の真理である。今の日本語で言えば、本音と建前に相当する。本当の真実は我々の方で把握しておいて、中国人には侵略史観を信じ込ませておくべきではないか。そのほうが中国は安定し、コントロールしやすいかもしれない。

6

本音と建前と言うと、建前の方にばかり注目して、人をだますための手段だと考える向きがある。だが、日本文化の特徴はむしろ本音の方にあるのではないか。本音という概念を持っている文化は、日本他には無いように思う。

日本人の場合、本音は平和であり、侵略は建前である。一方で、中国人にとっては、平和も侵略もどちらも建前である。中国人には本音というものがない。西洋人の場合、平和は建前で、本音は侵略だと思ひ込んでいる。

西洋では、欲望というものが人間の本心だと考えられている。しかし、仏陀が明らかにしたように、欲望はかりそめのものにすぎない。仏陀の薫陶を受けた我々日本人にとって、欲望は人間の本質ではありえないのである。

建前を建前と認識することは、本音を理解するための第一歩である。欲望は人間の建前にすぎない、ということが理解できるかどうか、そこに大きなギャップがある。

7

本音は事実に対応する。嘘偽りのないことを本音という。

本音という概念を成り立たせているのは、事実を重んじるという態度である。現実と一致する言葉が正しい言葉であり、現実に反する言葉が偽りの言葉である。事実を軽視する態度からは、本音という概念は生まれない。

事実よりも言葉を重んじるという点で、西洋人と中国人は似通っている。

『狂人日記』について

1

中国人は人の肉を食べる。昔の中国の料理本には、人肉の調理方法が載っている。また、中国の市場に人肉が流通していたことを示す資料は、沢山ある。人肉食は、中国の伝統文化である。

他方で、日本人は人間の肉を食べない。それは、あり得べからざることである。だから、太平洋戦争中の激戦地であるレイテ島などで、日本軍の兵士が共食いをしていたという話を聞くと、日本人は非常な衝撃を受ける。しかし、中国人にとっては、そうでもない。彼らには人肉食は普通のことである。

魯迅は日本に留学し、日本語と日本の文化に親しみ、日本的な感性を培った人である。その彼が中国に帰ると、食肉売場では人間の肉が売られていた。この事実には、魯迅は苦悩した。そして、中国での生活を続ける中で、それが本当に間違ったことなのかどうか、彼自身にも分からなくなってしまう。『狂人日記』には、その葛藤が表現されていると考えられる。

中華民国時代の中国では、政治家が人民主権を唱えるかたわら、市場には人肉が流通していた。これほどの矛盾があるだろうか。近代国家と人肉食は、絶対に相容れないものである。魯迅が指摘したかったのは、この問題であろう。

2

中国においては、人肉食の有無が、近代化の度合いを示すバロメーターになりうるのではないだろうか。たとえば、満洲国における人肉食の事例と、同時期の中国各地の人肉食の事例を調査し、比較してみるのも良いかもしれない。満洲国は日本の傀儡国家だったかもしれないが、少なくとも、人を食わない国家ではあった。魯迅が希求した新中国は、日本人の手によって建設されたのである。

中国人はいまだに『狂人日記』を、階級闘争や、古い儒教的な価値観の批判、という観点からしか受容できていない。彼らは今こそ、食人の問題と向き合うべきである。

中国が世界のリーダーになろうとしているときに、まだ人を食っているようでは困る。中国人自身がこの問題について調査し、国際社会に向けて報告を行うべきである。我々は、中国社会の実態を知らねばならない。

最近の話では、たとえば、一人っ子政策で要らなくなった子供はどうしたのか。文化大革命で死んだ人たちはどうなったのか。まず、そういうことを明らかにして、さらに、現在の状況はどうか、今後どういう対策が必要なのか、ということまで議論できるようになってもらいたい。

また、我々日本人や、中国以外の国の人々は、中国人のこの種の振る舞いを、あまり厳しく非難するべきではない。むしろ、公的な場で、この問題をきちんと議論できるような環境を整える、ということに努めなければならない。頭ごなしに非難したり、あるいは事実を否定したりするだけでは、問題を解決することはできない。

中国人はいまだに、食人の問題を解決できていない。我々は、彼らがそれを克服できるように、手助けをしてやらねばならない。また、それが中国の伝統だからという理由で、安易に人肉食を認めるべきでもない。文化の多様性は、無制限に認められるものではない。国際社会において、それは許されないことである。

参考文献

- 岡田英弘 『岡田英弘著作集全八巻』 藤原書店、二〇一三～二〇一六年
- 石原莞爾 『最終戦争論』 中央公論新社、二〇〇一年
- 横山臣平 『秘録石原莞爾』 芙蓉書房出版、一九九五年（とくに第七部「新日本の進路建言」）
- 阿部博行 『石原莞爾生涯とその時代 上・下』 法政大学出版局、二〇〇五年
- セシル・チエストン 『アメリカ史の真実』 渡部昇一監修、中山理訳、祥伝社、二〇一一年